
緋弾のアリア 五分間の最強

昼夜逆転

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア 五分間の最強

【NZコード】

N4295V

【作者名】

昼夜逆転

【あらすじ】

俺は、別に何の力もいらない。力があればそれに見合つだけの働きをしなければいけないと知っているから。

だが、俺は持ってしまっている。

ハンドレッドパワー 五分間身体能力を100倍にする力。

神崎・H・アリア。

武僧高に入れ？ あたしとパートナーを組め？

ほらみる。変な力を持つちまたからこんなに関わる羽目になるんだ。

馬鹿みたいなこと

一話 銀行強盗

人生は目立たないのが一番だ。

だから、俺はずつとひそかにこっそりと生きてきたのだが、今日

の俺 松島京まつしまきょうは一味違つた。

俺、というより世界がいじわるしたんだ。

現在、銀行強盗が立て籠もつてゐる現場に直面してます 人質として。

両手両足を縛られ、通信道具も没収された状態で。

俺の周りには、他の人質もいる。

全員がここに集められていて、一人の銃を持つた覆面男 背丈で判断した が下卑た笑いをあげている。

犯人はグループで他に二名ほどいる。

全員銃を持っており、動けば一発でバンッ！ だ。

さつき、ここに警備官が立ち向かっていたが格闘技もできるのか、あつさりとやられていた。

歯向かつた奴がどうなるかの見せしめに腹に銃弾も撃ち込まれていた。

早く治療しないとどうなるか分からぬが、警察の面々もこの現状に手をこまねいていた。

武偵も到着が遅いようで つーかたとえ来たとしても人質を解放しない限り打開は無理だろう。

まあ、俺は知ったこっちゃない。

目立ちたくない俺をこんなに目立たせやがつた犯人グループは憎いがどうこうするつもりもない。

みんなが怯えている中、一人だけつまらなそうにしていた。

犯人は警察に逃走用の車を用意しろと要求していたが、中々それ

が先に進まず、怒っていたようだ。

犯人が威嚇のためか天井に数発弾を撃ち込む。

もちろん合わせたかのように人質は悲鳴をあげている。

あつ、俺はそんなびびりじゃないから悲鳴なんてあげていない。

というより親父が拳銃持つてるような仕事をしていて、結構慣れ

ている。

テレビの中の映像のよつじーと見ていた。

犯人はそれが気に食わなかつたのか、俺の髪を掴みあげた。

ぶちぶちとハゲへの道を辿るような嫌な音を出しながら男の気持ち悪い覆面と視線を交差する。

あまり汚い手では触られたくないもんだ。

「さつきからテメエーはきにくわねえーなつ！」

覆面がなければつばがかかるような声のあげかたに俺はため息をつく。

「人の髪引つ張つても毛、伸びねーぞハゲ」

「ハゲてねーよ！」

「じゃあ、覆面とつてみろや。見せてみろよノットヘアー」

「んだ、見せてやるうかー！」

突然覆面を取り外そうとした男に仲間が慌てて止めに入る。

「もしも、顔が映つたらやばいつて。それより、例の。こいつこましょーよ。見せしめに」

見せしめ？

何だ、逆らつた奴に銃弾打ち込む奴か？

まあ、俺ならいいか。

打ち込まれる前に能力を使えばダメージはないしな。

今俺と言い合っていた男がこの三人のリーダーなのだろう。

残りの一人が敬語を使って話しているところを見るに断定できる。

随分と馬鹿なリーダーだ。

俺なら間違なくこいつの下にはつかない。

リーダーらしき男は途端嘲笑うように鼻を鳴らす。

「そうだな。おい、てめー外にでる」

両足が縛られている相手に向かつて何を言つているんだこいつは。

「おっ、とうとう人質解放する気になつたか。んじゃ、足の縄解いてくれ。血が止まつて壊死しそうだ」

「ちげーよばあーか。これからお前は見せしめに殺すんだよ」

周囲にいた人質は全員が息を呑む。

俺が血みどろになつて死ぬ姿でも想像したのか。

涙を出して、氣絶した奴までいる。

他人の死に対してもだけ敏感なんだこいつらは、そんなに敏感に反応してたら生きていくのが大変だと思うね。

当然びびるだろ？ んー？ といった感じでリーダーは顔を寄せてくる。

鼻息が荒いのは怒りで興奮しているのか。

それとも俺が魅力的過ぎるので興奮しているのか。

後者なら今すぐ走つて逃げ出す。

覆面という固定された表情が近づいてくるのは若干の恐怖を感じ

るんだが、俺だけか？

「あつそ、じゃあ、外まで歩いていいてやるから、縄外せ」

およそ人質の態度ではない言い方で返す。

「あり？ なんでびびってねーんだ？」

「別に死ぬのに恐怖感じたら生きてらんねーだろ。おら、さつさ
としり」

これは嘘偽りない気持ちだ。

俺は自分の持っているある能力で人知れず人助けをしていた。
中には犯罪者と戦うような場面も何度も切り抜けてきた。
そんな人生を送っていると死への恐怖など薄れてしまっている。
それは危険なことかもしれないがどうでもいい。

「つーか、なんでてめーが上から目線なんだよ」

愚痴りながらも、せつせと縄を解くこには中々ドレイ根性が座
つている。

やつと解放された足を数度動かして、動く事を確認。

「んじや、てめえら行つてくるが、くれぐれも人質を逃がすなよ」

男が俺に銃を突きつけながら歩いていく。
そして、止まっている俺にぶつかる。

「歩けよつー」

「あー殺す前にできれば俺の鞄に入ってる仮面を取ってくれるといつれしいんだけど」

その仮面は普段、人助けをするときにつけるものだ。
顔をばれると色々面倒だからな。

「あー？ まあ、死ぬ最後の願いぐらに叶えてやつてもいいか

「じゃあ、山盛りのたらこスパゲッティが食いたい

俺の小さな夢を述べると、

「黙れよ。おら、仮面だ。つてこれ、昔やつてたアニメ『顔面ライダー』のお面じゅん！」

語尾が噛んでいたのは驚きからだろ？

顔面ライダーは、仮 ライダーが売れているのを知り、どつかの会社がパクつたものだ。

文字通り顔面だけで悪い敵を倒す、キモキモチワルイで有名だ。
女が語尾とか噛むと可愛いなと思うが男が噛んでもキモイのなど
思いながら、俺は自慢げに伝える。

「死ぬときはそのお面つけて死ぬって決めてたんだ

「なんか、かっこいいー！」

変なところで息があつてしまつた。俺は嘘半分なんだが。
もしかしたら、人を傷つけるようなことをしない場面でこいつと
知り合えていたら友達くらいにはなつてやつたかもな。
俺は仮面をつけてもらい、自動ドアまで歩いていく。

「いい」でいい

男は自動ドアからでるギリギリの場所で俺の頭に拳銃を突きつけながら、叫んだ。

結構いかした拳銃だが、生憎そつちの知識は皆無に等しいのでかつこいとしか言つ事はできない。

「おい、のりま警察！」

外で構えていた、警察に叫ぶ。

全員瞬時に隣の男にそれぞれが持つている得物を構える。
のりま？ ああ、確かにこの強盗は警察に逃走用の車をもつてこいと交渉していたな、と思い出す。

確かにあれからまだ、二十分程度しか経っていないと思うが。
警察側は時間を稼いで武偵の到着でも待つてているのかもしれない。
それを警戒してこの男は早めに脅しにかかったのか。
意外と考えてるんだな。

「いいにこる、まだ中学生の男は、おまえら警察がのりまに行動してこいせいで死にまーす」

中学生と名乗った覚えはないが制服で判断したのか？
熱がりな俺は冬でもワイシャツで過ごしているので、中学生かどうか見極めるのは厳しいはずだ。
何も考えずにこいつ言つたな。

「ま、待て！ もうすぐ、車は届く！ 早く来るな」

警察の場を指揮する人は慌てたように叫ぶ。

周りからのカメラのフラッシュが半端ない。

……テレビに映つちまうのか。

それは嫌だが、仮面をつけていて正解だった。

龍多ははあ、と息を吐いたあと、空を見上げた。
ああ、空が遠いな。

「それじゃあ、よい旅を」

男が引き金を引くのが見える。ゆっくりとした、俺の恐怖心を仰ぐようなんびりさだ。

それが完全に引かれるよりも先に、俺は能力を発動させた。

ハンドレッドパワー　五分間身体能力を百倍にする　を発動させた。

一話 解決

俺は引き金が完全に引かれる前に能力を発動させた。

ワンテンポ遅れて、拳銃が煌めき、弾が放出されたのが見える。遅い。

俺はそれを首を振り動かして避け、その流れのまま縄を切り解放された腕で男の顔面に拳を入れる。

加減はしたつもりだったが、それでも三十メートルくらいは飛んでしまったようだ。

御愁傷様。

俺は祈りを捧げた。

死んではいないと思うけど、もしも死んでたら俺が犯罪者か。

呆気にとられたかのように静まり返る場。

視線が集まる、外、中から。

そりやそうだ。

誰だって、目の前で殺されかけてた奴がいきなり、殺そうとしていた奴をぶつ飛ばした状況を見れば。

驚くさ。

俺は銀行内を見る。

たぶんみんな、恐怖で俺の仮面を被る前 素顔なんて気にもかけていないはずだ。

中にいた男二人も、外の連中同様驚いていたが、反射的にこちらに拳銃を発砲した。

正直こちらでよかつた。

人質のほうに闇雲に発射されたら、申し訳なさ過ぎる。俺は銃弾を掴み、握りつぶす。

「ひいつ！ 化け物だ！」

「逃げられるかよ？」

俺が軽く動けば、発砲してきた男の目の前。
逃げ出そうとしていた、覆面の上からでも分かる恐怖の色を感じたが、問答無用で拳を入れる。

さつきよりも弱くやつたが、壁にめりこんでしまった。
まじ死ぬなよ。ギャグみたいな感じで終わらしてくれ。

「う、動くなつ！」

のん気にそんなことを考えていたら、最悪の事態に。
最後の一人が膝をがくがくさせながらも人質に拳銃を向けていた。
さつき俺が考えていた通りのことが起きてしまった。
というか、外にいる奴らは何もする気ないのか？
麻酔銃でも持つてねえの？

それを一発撃つてくれりやいいのに。
俺は降参とばかりに両手をあげる。

男は俺の様子に満足したように、もつ片方の手で近くに転がっている拳銃を拾つ。

「動くなよ……黙つて撃たれるよ

まあ、いい。

この銀行の屋上に続くと思われる階段から足音がする。
完全に消えてはいるので普通の俺なら分からないが、聴力だつて半端ない。

だから、挑発する。

「早く撃てよ。手が震える腰抜けさん」

人を殺す恐怖か、俺に対する恐怖かは知らないが、中々踏ん切りがついていない男を急かすように言つ。

男は銃口を俺の頭ではなく心臓に向ける。

先程リーダーが避けられているのを見たからかもしない。まあ、俺も頭か体なら体のほうがあたりそうだしな。使つたことなんてないからなんとも言えないが。

「うわあああ！」

男はなぜか悲鳴を挙げながら引き金を引いた。

俺はそれを動きもせずに直撃して、後ろに倒れた。

こうしておけば、後は階段のほうにいるだれかがどうにかしてくれるだろう。

生憎、時間切れた。

銃弾を喰らつた後に俺の身体強化 ハンドレッドパワーは消えてしまった。

だからこそ急かしたんだけどな。

これは五分間身体能力を百倍に高めるが、使つたら再使用までは十分経たないと使えない悲しい能力だ。

なぜ、俺にこんな力があるのか。

そんなもん知らんし、知りたくもない。

知つて変なものを背負つたりするよりかは自分で力の使い方を考えたほうがよっぽどましだ。

俺は人助けのためにこの力を使う。

そう、決めた。

階段から降りてきた 足音は半端なく消していたが、俺の身体強化時にばつちり聞こえていた おそらく救助にきたと思われる

……ちっこい女だ。

いや、女だからとか、ちっこいからとかで偏見を持つたりはしないが……大丈夫だよな？

と、そんな心配はいらなかつた。

一瞬で男を締め上げて事件終了。

女は全員の縄を解いて解放して、俺の方に歩むよつて来る。

中に警察が入つてきていろいろやつている。

音は俺の首の脈を触つてきたときに、ひやりとした女の子のふに
ふにハンドにぞくつとして、慌てて立ちあがる。

いやー、恥ずい。

女に對して面識がない俺にとつて軽く触れられるだけでも反射的に
に避けてしまうのだ。

「あんた、生きてたのね」

人の首の当たり触つて脈があるか調べていたくせにその言い草は
何だ。

「当たり前だ」

俺は腕時計を確認する。

能力が切れてから、現在まだ五分程度しか経つていない。
こいつから逃げるにはあと五分は必要だ。

「あんたが、あの二人倒したんでしょ？ どうやつて？」

能力が使えるよつになつたら即座にこの場を離れよつ。

面倒事は嫌いだからな。
中に警察が入つてくる。

警察は神崎さんとか呼んでいるから、たぶんこいつの名前は神崎
ほこやららなのだろう。

神崎、ね。

確証はなかつたし、田の前で犯罪者を捕まえるまで信用できなか

つたが、ちつこい女は武偵のよつだ。

神崎は警察と色々話しているので、俺はこいつ逃げよつとする。

「君は、武偵なんだよね？」

警察の一人がそう言つてくれる。
説明も面倒だ。

第一、一般人だと言つた場合何が起こるか予想できたもんじやない
ので逆らわずに流れに身を任せよつ。
長い物には巻かれろつて言つし。
意味は少し違うかもしれないが。

「ああ、ずっとチャンスを窺つていたんだ」

適当に会わせて終わりにしてよい。
武偵という証拠は持つていないので、深く尋ねられるとまづいの
で警察の人たちからよりを置く。
というかこつそり抜け出し、銀行から出ると待ち構えていたかの
ように報道陣が近寄つてくる。
こいつらは、何もしないで面白いネタだけを取らうとするのか。
いらつぐ。

それが仕事だと分かつてはいるが……好きにはなれない。

「名前は？」

他の被害者のほうに行つてやれ、といつてもそれどころじやない
か。

「あんたに名乗る必要はない。俺はあんたらみたいな奴らは嫌いな
んだ。失せる」

俺の怒りを滲ませた声に怯むが、それでも自分たちを犯罪者たちのよつて殴る」とはない、と思つてゐるのか。構わずにマイクを突きつけてくる。

時間が十分経つた。

殴り飛ばしてやりたい衝動をなんとか堪え、能力を発動させようとしたら、さつきのちつこに女が近づいてくる。

「ああ、ちゅうとこに用があるから、あんたたちひとつか行つてなさい」

女はやつて、俺を銀行内に引き戻す。

そのままで屋上まで、連れて行こうとしたのでぱんと手を叩いた。はた

「俺は家に帰りたいんだが」

「あんた、武僧でしょ？ 報告書書く必要あるんじゃないの？ 送つてくれよ」

たとえそだとしてもあんたの力を借りるつもりはないと言おうとしたが、下手に波立てると面倒そうなので、

「違つ」

「えつ？」

否定すると途端に目を丸くする。
そこに畳み掛ける。

「俺は普通の学校に通う普通の人間。あんたらのよつた拳銃振り回

したりする危険な人間じゃないんだ」

基本、関わり合いたくない奴には冷たくあしらひようとしている。そうすれば、大抵嫌惡の目で見てくるからな。俺のひそやかな人生は、他人を怒らせることで成り立つているのだ。

そんな性格が嫌な奴と誰が友達になりたい？だから、俺はひつそり暮らせるのだ。

目の前にいる、いかにも厄介ごとを持つてきそうな奴は余計に冷たい態度を取るのだ。

「あんた、武僧じゃないの？ すっごい強かつたじゃない」

「あれは、武道を習つてるからな。護身術みたいなもんだ」

もちろん嘘だ。

誤魔かす方法としてはこれはなかなか使い勝手がいい。

「日本の武道はすごいのね……」

素直に感心した様子は俺が望んでいたのとは違う。

日本の、つてことはこいつは外人か。

確かに髪の色はカメリニアでとても日本人とは思えない。

不良というわけでもなさそудし。

異常に日本語がうまいのでそっちの線は完全に考えていなかつた。

「あんた、武僧になりなさい」

突然で、指を突きつけてきたので俺は一瞬拳動が遅れる。

「アンタ、何年?」

「中学二年だが……」

素直に答えてからしまったと口を押さえる。

相手は武偵なのだ。

どんな小さい情報でも与えたらこちらのすべてを知られるのだ。
これは俺の学校でそんな話題があつたからの知識で、正しいかどうかなんて分からぬが、あながち間違つてもいないと思う。

「じゃあ、今年、東京武偵高に入学しなさい。分かった?」

「……分からん。勝手に人の人生を決めんなよ。俺は平凡に過ごす、
陰みたいにな」

「あんたには才能がある。それを棒に振るような真似はあたしが許
さない」

一方的に言つと、仮面を外そつと手を伸ばしてくる。
背伸びして回避すると、ぴょんぴょんと跳ねてるのだ、
可愛いなこいつ、犬みたいだ。
しばらく俺が楽しんでいると、むーと唸り顔を赤くする。

「あなたの素顔を見せなさいよ!」

ああ、そうだつたな。

こいつは俺の素顔が分からないんだ。

つまり、ここで逃げてしまえば問題はない。

「俺は武偵になるつもりはねーからな」

能力発動。

俺は神崎の手を振り払う。

負けじと神崎は抱きついてきたが、それもひらりと避ける。

微かに尻に手が当たった。この変態め。

俺は一気に階段を駆け上り、屋上にでたら、思いつきり跳んだ。

身体能力百倍だぞ？

通常時でジャンプして一メートル飛べれば単純計算で百メートルは跳べるんだ。

つまり、逃げる事に成功したわけだ。

だが、これが俺にとっての不幸の始まりだと気づいたのは家に帰つてからのことだった。

二話 メインと後半番外編が入るといつ謎の話（前書き）

とにかく、謝ります。すみませんでした、と。

三話 メインと後半番外編が入るといつ謎の話

家に着いてから分かつた事があります。

その前に、俺は財布に学生証を入れる中々優等生なのです。
そして、財布は基本後ろのポケットに入れるのです。

つまり、何がいいたいかと言いますと……。

微かに当たつた神崎の攻撃は、俺の後ろポケットにヒットしていったのだ。

狙つてやつたかどうかは知らないが、その攻撃で俺の財布はポケットからドロップしました。

最悪の状況を考えるなら、神崎にその財布を拾われた可能性があるということだ。

むしろそこら辺の不良にでも拾われているほうがよっぽど幸いだ。

「ほら、夕飯の時にぼうとしない

俺の母親が、俺が石像のよくなつたのを注意する。

テレビでは俺のテンションを下げるかのように夕方の事件のニュースが流れていた。

それを見ていると、手柄はすべて神崎の物になっていた。

俺という存在はあまりにも情報が少ない事から、省かれているようだ。

神崎・H・アリア。

海外の武偵局に所属しているらしいが、今日は日本に用があつたらしく、さりに偶然にも近くに居合わせたことから事件解決に協力したらしい。

偶然、偶然と俺に不幸が重なりやがった。

マジで、外人だ。日本語うまいから日本にはよく来るのか？

そんなことはない。すぐロンドンに帰還してくるのなら別にいい。

向こうで、忙しく毎日を過いでいれば俺という存在はすぐ忘れ去られるださう。

だけど、もしも日本に滞在して、俺を探すなんてことがあつたら。その可能性も捨てきれない事がなによりも恐ひしい。

あいつはなぜか俺に興味を抱いていた。

学生証という手がかりと、財布に入っている店のポイントカード等。

一つ念ねば、俺の名前と学校がばれてしまつのも時間の問題だらう。

最悪住所さえもばれる。

「一人とも、氣をつけなさいよ

近くで起つた事件に対し、母さんは疲れたようにため息を漏らす。

俺と妹の二人のことだ。

妹といふのは妹の名前だ。

松島、妹。妹と書いて妹と読む。

なんともまあ、単純だ。

「ねえ、お母さんー 私武偵になりたいっー！」

妹はいつも、こんな事を言つてゐる。

武偵はとても危険といふことが母さんの頭にはこびついているので、いつもノーと答えてゐる。

「なんで、女の子がこんなこと言つて、男の子の京は嘘一つかないのよ。性格逆なんじゃないの？」

母さんがぶつぶつ文句をたれている。

母さんからみたら俺は大人しい優等生。妹は喧嘩好きのやんちゃ娘に映つていい。

「京が武偵になりたいのなら、止めはしないけど……」

「その言い方だとすぐ俺を追い出したいみたいだな」「？」

俺は忘れちゃったもんじゃないので、余話に参加する。

「男の子は少しくらいやんけやなほつが可憐いのよ。あんた高校は？」

「適当に、近くの進学校に行くよ」

俺の答えが気に食わないのか、「かあっ！」と叫んだが、無視する。

「まつたく、父さんは今も武装検事として頑張ってるのに……子は意思を引き継がないのかねあ」

はあと年甲斐にも頬に手を当て、ため息を吐く。

俺は親父が大変そうなのを見てるから、武偵なんてやりたくないんだ。

あと、銃火器はこえーし。

それに妹が意思引き継ぐべき満々だろ、俺じゃなくていいだろ。

「お母さんー、お父さんだつて昔武偵だつたんでしょっ！」

妹はここじやとばかりに食いかかる。

それにしても、今日はいつももまして、食つて掛かるなあ。
無駄にテレビに触発されたからかも知れないな。

「だから、あなたは女でしょっ！」

母ちゃんも古い考え方を持つてるからこいつもこんな平行線の会話。
妹はびしつとテレビを指差す。

「神崎・H・アリアさんだつて女の子だよっ！」

テレビに映つている女の子　　見た目の割りに俺と同い年の
を指差す。

俺はぶつと口に含んでいた麦茶を噴出してしまった。

「兄さん汚い……」

妹の冷たい視線に心を傷つけながらもティッシュで拭く。

忘れてた。

俺の問題が何一つ解決していない事に。

「あんたどうしたのよ」

母さんも冷たい視線は大して気にならない。
拭き終えた俺は、夕飯の片づけをして、

「俺はもう寝るから……」

自分の部屋に行きたかった。

じの先、どうなるか、俺は不安で胸がいっぱいだった。

メインストーリーが短いので主人公の人助けをかいだストーリーを書きました。

以下メインストーリーとは関係ないので読みたくない人はバックを進めます。

妹の友達が家に来るらしいので会いたくない俺は街に繰り出していた。

そして、公園のベンチで風船を木に引っ掛けた子がいたのでそれをとつて渡してなりゆきで一緒にいたら誘拐された。

助けて終わり。

今日の日記は終了。

なぜかこの日記を妹が見たらしく、なぜそんな状況になったのかを激しく聞いてきたのでリアルタイムで話そうではないか。

俺は公園で遊んでいる元気そうな子供たちを激しく睨んでいた。

理由は先程買おうと自販機で財布を開けたら、中から小銭が零れ落ち、総計514円が自販機の下に入ってしまい取れなくなつたか

うらやましい。

ハンデレッドパワーを使って取つてやるつかと思ったが余計に高

くつづのでやめた。

ベンチでうな垂れていたと、一人の少女が俺に涙目で近寄ってきた。

「うー、怖いお兄ちゃん!」

怖いのこ、こつは俺を侮辱することをこつとせなか肝が据わつてやがる。

俺はそれでも相手が少女なので優しく「なんだよ」と囁いてやる。

「木に風船が引っかかっちゃったから……」

なるほど。

子供が指差すほうに視線を送ると、俺よりも少し高い木に風船が引っかかっているのが分かる。

俺の身長ならジャンプすれば届くな。

「うー、取ってくれたら向こでもしますから……お願いしますー。」

涙目で俺に懇願する。

なんだか俺が泣かせているようで嫌なので頭を搔き毛り立ち上がる。

木の前に行き、ジャンプ。

あつさつとれたので拍子抜けな感じもしないではないが……どうでもいいか。

「ほひ、もう離すなよ」

少女に風船を渡すとぱあつ。

満面の笑みを咲かせる。

可愛らしい笑顔はこいつの将来は美人になると表しているようだ。

「ありがとうございます！ 恐いお兄ちゃんつ」

子供の無垢な笑顔は癒されるが、それだけに無垢な言葉は俺の心臓へのダメージがでかい。

「怖いって…… そんなにか？」

「はい。田が「ひづばばばーんて鋭くて、ぼぶぶぶーんてとがつていました」

子供の感性には唖然とするしかない。
なんだずばばばーんて。いや、それはまだいいがぼぶぶぶーんつてなんだよ。

想像ができない　俺は泡でも吹いていたのか。
口をそれとなく拭つてみるとそんな様子はない。

「お、お兄ちゃん聞きたい事があるんだけど……」

途端しおりしくなる。感情の起伏が激しいのは子供の特権だ。
俺は面倒ながらも話に耳を傾ける。

「私……遊ぶ人がいないんです。だから遊んでくださいっ！」

「断る」

「ええつ！？」

なぜ、そこまで驚くのか知らないが断つた理由は俺がガキのおもりなぞできないと思うからだ。

暇してるので断らなくてもいいのだが……気分的に嫌だ。

「そうですか……私の事は遊びだったんですね」

「待て待て。なぜお前みたいな小さい子がそんな言葉を知ってるのかを問い合わせたいが……そもそも俺とお前は今始めて会ったんだ」

「実は前世が恋人同士だったかもしれないですよ?」

「電波だ。電波がいる」

見たところこの子は小学校低学年くらいだろう。

なのにここまで言葉を知っているとは。俺なんか小学校の頃は高校があることも知らなくて中学で勉強は最後だと思っていたぐらいなのに。

「あなた、お風呂にする? 私にする? それとも、『・は・ん?』

「やつぱり子供なんだな」

いい間違いをしたのはわざとかもしれないが疑い出したら止まらないので、何も言つまい。

「それじゃ、遊ぼっ」亞祖母。口増し照る。

少女は、少女らしからぬ力で俺を引っ張ると公園から連れ去つていった。

街にてた俺は薄い財布をさらうと薄くしていた。

「……てめえ、いい性格してんな」

俺の横でアイスを舐めている少女は嬉しそうに手を細めていた。
俺の金で食つていいアイスだ。なぜかしきりにうなづいた。

「お兄ちゃん、ありがとっ！」

「俺の事怖いとか言つておいてよくもまあ、たかれるな」

俺がもし街中で怖い奴を見かけたら話しあげずに避けるぞ。
子供は人の心の機微に鋭いとか聞いた事がある。
もしかしたら俺の事は最初から怖いとは思つていないでふざけて
たんじゃないかな？

「次は、パフェ食べたいっ！」

「なるほど、俺はお前を殴つていいのか？」

「一生のお願いですっ！」

「どうせまた使うんだろ？」

「うそっ！」

「ぱあつと子供らしい無垢な笑顔は人の悪い考え方を浄化させる力でもあるのか。

奢つてもいいかなという気持ちにさせられそうになるが、必死に首を振る。

「それより、親は？ 又は家は？ 送つてくぞ」

時間は昼に差し掛かる。

昼ごはんを食いに戻つてもいい時間だ。

だが、少女は悲しそうに目を伏せ、

「私の家、両親が急がしいんです。だから、家に帰つてもいるのは使用者だけです」

シヨウニーン？

……もしかしてこいついとこの穰ちゃんなのか？

それも使用者がいるレベルだ、かなりのものだ。

俺はさつきまでの行いを思い出し……特に無礼なところはなかつたなどと思い、なぜだか気まずい空気が流れる中、口火を切る。

「それでも待つてくれる人がいんだから帰れよ。その使用者の人はお前のためにご飯を作ってくれてんだろう？」

「はい、です」

「だつたら帰れ」

俺は悲しそうに、縋るようにしている少女の顔を見ずに告げる。

俺は女に甘いらしい。本来なら人に何かを奢る事のないドケチな俺がアイスなど奢つているんだからな。

「分かりましたです……」

やはり寂しそうにしているので、妥協案をだす。

「午後だ」

「え？」

「午後、さつきの公園に来い。遊んでやるよ」

パフェは奢らないけどな、と付け足す。

俺の言葉を理解したのか。

真っ暗だった道に光が見えたように希望に瞳を輝かせ、

「ありがとうございます！」

飛びついてきた。

ほのかな少女、ではなく女と表現したほうがいいような香りが鼻孔をくすぐる。

腹部にあたる少女の胸は……少女の割にはそれなりの大きさだ。妹よりはあるかもしれない。

最近の小学生は発育がいいと聞くが、ここまでとはな。ロリコンが見たら喜ぶのか、悲しむのか分からんな。

ホールドを外す。

多少恥ずかしさを感じたのはなぜだ？　俺は小さい子が好きなのか？

「分かりました。それじゃ、帰りますっ！」

「ああ、送つてかなくていいか?」

ここは人通りが少ない、夜に歩けば不良が沸くような危険なところだ。

今も人が一人もいない。

もう少し考えて進行方向を決めればよかつたな。

普段から人がいないところを好む俺の悪い癖かもしけない。

「大丈夫です。家はでかいんでどこにいても分かります」

この街にはでかい家は結構あるが、大丈夫か?
まあ、間違えても誰かが面倒を見てくれるだろう。
さすがに人通りのあるところまではついて行く。後は適当でいいや。

と、楽観的に構えていたら……後ろから殴打された。
頭に激痛が走り、俺はぎりぎりで少女に倒れ掛からないように体をずらして倒れた。

「お兄ちゃん!」

「ガキはこっちに来いつ！」

俺を殴ったと思われる男　　スキンヘッドの頭に斬り傷がある
かにもな男だ。

さらに、後ろから黒塗りの車がやつて来て、男が少女を車に連れ込む。

誘拐か?

少女はいいとこの人みたいだし、くそ。

俺は警察に連絡しようと携帯を取り出す。

本当はハンドレッドパワーを使ったほうがいいのかもしれないが、

人質をとられている。

一撃で仕留められなければかえつて少女を危険に晒してしまつ。すると、男は窓を開け、馬鹿にするよつに笑い飛ばし。

「警察に連絡しても無駄だぜ。そつちとは大量の金を払つ代わりに見逃してくれるようにな交渉してゐるからな。正確にはこのガキの身代金の半額だぜつ。ひやつはつはつは」

嘘かほんとかは分からぬが、そつらしき。

俺はすぐさまカメラモードに切り替え、車を取れるよつにしておく。

番号もつけてゐしな。

「じゃーな

「お兄ちゃんつー、大丈夫つー?」

中から少女の心配する声が聞こえる。

……お前は自分の心配をしてくれよ。

窓はしまり、車は俺を馬鹿にするよつに去つていぐ。

やばい、頭が。

しつかりと写真に収めたが。

殴られた場所が悪かつたのが激痛が走り考へる事ができない。眩暈がする。

ハンドレッドパワーを使つてもこんな状態じや意味がないな。とりあえず、少し休憩だな。

ジ・ハンディ---

二話 メインと後半番外編が入るところの謎の話（後書き）

京「なんだ、あの後半は」

作者「いやー、メインストーリーが思いつかないし、でも短いと読者に對してなんか無礼といつか」

京「俺が読者ならあの後半のほうが無礼だぞ。しかも完結じゃないし。なんだ最後の次回に続くじゃなくて、ジ・エンドって。俺が死んだみたいじやないか」

作者「また、メインストーリーが短いときにあげよつかなって」

京「忘れてると思うがな」

作者「まあ、そのときは作者がジ・エンドですね」

京「せめて、英語で書け。後覚えておいてもらえることを祈つておけ」

作者「はい、祈つてきます」

四話 アリア強襲（前書き）

8月1~1日まで用事があり、更新できなかつてあつません。

四話 アリア強襲

次の日。

「兄さん、朝食出来たって」

ドア越しに妹の声がしたので、俺は制服に袖を通す。
昨日はたまたま上着を着てなくてラッキーと思っていたが、結局
意味のないことだったな。

下りて朝食を摂り、学校に向かう。
いつものように後ろをひょこひょこ付いて来る妹に言い放つ。

「俺は先行くぞ」

「あつ、待つてよ」

妹の返事なんざ微塵も聞かず、俺は学校を目指す。
道中、昨日のことを思い出していた。

もちろん、神崎・H・アリアのことだ。

それにして……顔を見たのは初めてだつたから驚いたな。
妹の話を聞く限りでは半端なく強い人間というイメージしかなか
つたので、すっげえむきむきな女を想像してただけどな。
性格は大体予想通りだつたが。

そんなことを考えていたら教室にたどり着いたので自分の席に座
る。

クラスのみんなは受験勉強に励んでいる。

中には前期に合格している人もいるが他の人に迷惑をかけないよ
うに本を読んだりと自分の世界に入り込んでいる。

俺は前期試験を受けるつもりはない。

小論文の練習とか面接の練習とか無駄に時間が増えるのが嫌だつたからだ。

それに前期で受かると変える事ができないのも嫌だ。

どうせ、後期で受かるから俺は特に深いことを考えてはいない。志望校今のレベルから一、二つ分くらい落とした場所を選択しているからそこまで力を入れて勉強はしない。

楽にしたいためではない。

ちゃんと大体の人生設計はできている。

ランクを下げた高校でトップレベルの成績を取りつづけて、国立、公立の大学に推薦で入学。

後は自分のやりたい仕事 小説家 を目指しながらサラリーマンとして働く。

俺の人生はそんなところだ。

みんながせつせと勉強するのを尻目に、俺はノートを開く。

昨日の銀行強盗のネタはあまり参考にはならないがメモしておこうと、ネタノートに書いていく。

これが普通、俺の普通だ。

大きすぎず、小さすぎない夢を追いながらの生活。

十分でもない、かと言つて不十分でもない人生。

俺の能力はおまけのようなもの。あまりほしくはないもの。

そう、そんな人生設計で愉悦していた時に。

『三年一組の松島京くん。校内にいましたら至急校長室まで来なさい。繰り返します……』

一斉にこちらに視線が集まる。

普段俺に関わる人間はいないと言つても過言ではないほどにないが、やはり人間。

問題が起きると気になるようだ。

しかも、優等生の俺だからな。

学校の成績も常にトップレベルの俺だ。

そんな奴が一体何をしたんだという視線が鋭く突き刺さる。

それでも、「何したんだよ」と軽口を叩いてくる奴が一人もいなのが俺の中学生生活を最も顕著に表しているだろう。

メモノートをしまい、席を立つて、教室を出る。

普通職員室に呼ばれるのに校長室に呼ばれたことから、俺は大体俺が呼ばれた理由を理解していた。

教室をでて校長室があるのが一階で、俺の教室は三階だ。一つ階段を降りて、校長室に向かおうとすると。

「兄さんなにやったの？」

妹がいた。

妹は息を切らしているので、廊下を走ってきたことが分かる。

「じりねえよ。それより何で、お前がここにいるんだよ」

「いや、兄さんの話題つてクラスで話すと人気でね。聞きに行けって言われたんだ」

お前は兄を笑いの種にして友達と交流しているのか。

今度から俺に何か面白い出来事があつても話すのはやめよう。

妹に対して心を僅かに閉ざした俺は「早く教室に戻れ」と吐き捨てるように言つて校長室に入った。

中に入ると、ちつこいピンクに近い髪をした少女俺の予想通りの女子が偉そうに座っていた。

大体、予想は出来ていたし、覚悟もできていた。

それでも、いざ突きつけられるとやはりショックを受けるものだ。

「久しぶりね。松島京」

ひらひらとからかうように財布を振る。

なんか軽そうに見えるのは気のせいだと思いたい。

大きなカメリアの瞳をこちらに向ける小さい女。

妹とあかりの憧れである、女 神崎・H・アリア。

二人に聞かされた話が奮い起る。

今まで犯罪者を逃がしたことがない。

『双剣双銃のアリア』といつ名を持つていること。

などなどだ。

嫌がる素振りは顔には出わず、首を傾げて、演技する。

「あんたはちよつと出てなさい」

近くでおろおろしていた校長に向いて言い放つ。

なんて強気なんだこいつは。

そして校長もおどおど出て行くな。

いや、正直こいつのほうが話しやすいはあるが……でもなあ。

とりあえず、これは既に負け将棋のような物だと割り切ろう。

校長室に備え付けられたふかふかのソファに腰を下ろし、神崎を見据える。

「突然、僕を呼んだけど、どうしたんですか？」

昨日と口調を一変させ、おどおどと氣弱そうな振りをする。

唯一残った、こちらの手札 顔がばれていないこと。

昨日と様子が変わってしまえばもしかしたら騙せるかもと1%程度は思っていたが。

「こきなりキモイわ。普通にしなさい」

欠片も無理だった。

いや、分かつっていたが。

「あ、あの、何と勘違いしてるんですか？」

それでも、演技を続けようとした俺。

ここまでくれば意地に近い。

「あんた、なに言つてゐのよ」

さすがにここまで来ると、神崎も多少は疑惑の顔で見てきた。
怪我の功名という奴か。

確かにこのまま演技をするのはつらい。

それでも、それを押し通すだけの度胸は俺にはあるのだ。

「もしかして……兄と間違えたんですか？」

俺はいもしない兄の事を話し出す。

実際、騙せるとは思つてない。

ただ、単にこいつをからかうと『シフトチャーンジ』しただけなのだ。

それにしても興味津々とばかりにこちらに顔を寄せてくる。
だから、俺は深刻そうな振りをして語りだす。

「僕の兄はヒーローに憧れてて、人を救うのがすきなんです。双子の兄ですごい似てるって言われるんですけど……僕ってちょっと体細いですよね？」

「そうね。もしかして、名前も同じ?」

そうねって何だ。こいつは人の嘘に何頷いてんだ。
下を向き笑いを堪えながら続ける。

「読みは同じです。漢字は違いますが……」

僕は とと俺は狂とポケットからだしたメモ帳に書き込む。
神崎はふむふむと関心したように頷いている。

こんな名前やだなあ。何か狂いそうだな。
というか何で人の嘘にこんなに真剣そうに聞いているんだろう。

「じゃあ、この学生手帳は？」

例のブツを取り出してくる。

俺は「あっ」とわざと匕首へ声をあげ、

「兄さんのだつー。」

俺のだ。

「それをどうで拾つたんですかー!?」

さらにわざと匕首突っかかり、神崎の肩を揺らす。

神崎は「やめなさいよー」とジーブラーーの聞いた声で言つ。

「昨日拾つたのよ。ああ、昨日の銀行強盗事件知つてる?」

「はい」

現場にいましたから。生中継でしたから。

「そこで、その狂つて奴が現れて一人の銀行強盗を倒したのよ。それで、もしかしたらこいつなら私のパートナーになれる」と声をかけたら……」

「かけたら？」

「逃げられたのよ。咄嗟に抱え込むとしたけど、あっさり逃げられてその時に落としたらしきこの財布だけが手がかりなのよ」

「せうなんですか……」

いかにも残念そうに声をもras。まじで噴出しそうだ。誰か時間止めてくれ。そして、大笑いした後にまた動かしてくれ。

「ねえ、あんた兄弟なんでしょう？ 家にはいないの？ ていうか学校は？」

「……兄さんは中学三年になつてから突然『俺はヒーローになるぜつー』とかほざきながら家を飛び出して、今日までずっと帰つていんですけどよ」

「め、迷惑な兄ね……」

おじいちゃん、今迷惑つて言つただる。

田の前にいるんだからな。よく心に留めておけよ。

「せう、なら、どうしようかしら……？」

おひ、なんかいもしない存在を探す事を始めているぞ。

なんだ簡単に誤魔化せるじゃん、俺演劇の才能あるねと思つてると。

「じゃあ、ひょっと名簿調べてくれるからひょと待つてなさい。いろいろ聞きたいことがあるから」「

……笑いが止まらないぞ。

神崎が一生懸命教師に『松島狂つていますか?』って聞くんだぞ。ちよつと待て、松島狂つっていますかつて振り仮名振らずに書くと、松島、狂つてますかになるじゃねーか。

こんな名前嫌だね。

それはおいといて、もちろん言葉なので教師は字が分からないので、俺の事を言つてるとしか思えない。

そんなわけの分からぬ言い合いが繰り広げられる。

想像しただけで笑いがこみ上げてきそうだ。

校長室を出て隣にある職員室に神崎が入ったのを確認して、俺は笑いまくった。

転げまわったよ、ぞつきんがけのよつて。

そして、笑つてゐる最中に。

「アンタ……よくも、騙してくれたわね……」

肩を怒らして顔を真っ赤にして拳銃を両手に持つて……拳銃。

この学校はお前の通つてゐる学校とは違つて、拳銃なんてものないんだぞ。

あんまり簡単に抜くな。

「騙すつて何がですか? ぼ、僕は何も……」

「狂なんていよいよ! あんたが騙したッ!」

振りかぶり、発砲。

それは威嚇よつなのか、後ろにあつたタンスのよつなものにめり込む。

……高そうだけど、いいのか？

俺が心配していると、続けざまに走つてくる。

速い！

一瞬で田の前に現れたかと思うと、拳を振りぬいてくる。なんとか、それを勘で避けたが、その腕は急に方向転換して俺の腕を掴み、思いつきり投げられる。

背中から床に吊きつけられた。

受身なんて器用な真似、する暇もなく。

これが、武僧か。

ますますなりたくないね、なんで妹はこんなになりたいんだ。

「あんた、あたしを騙して恥をかかせて……怒つたつ！」

言わなくてさつきの気迫を見せられれば分かる。

俺が痛む背中を押さえながらだを起こすと、第一ラウンド開始とばかりにまた迫つてくる。

さつきとは違い、俺は避けるではなく掴んだのだが、それでもこまのよつに回転して腕を振りはらわれ、回転の勢いのままに蹴りを入れられ、止めにまた投げられた。

先程よりもコンボがつながりやがった。

拳銃を使わないのは致死性のダメージを『えないためか。

そんな配慮ができるなら、こんなことはやめてくれ。

「はやく立ちなさい。あんたはドレイよ。ドレイー！ あたしに一撃加えるまですつといつじてやるんだからー！」

一撃？ いれてやるだ。

最初の一発はまあ、こいつらも悪い事したからおあいここと思つて甘んじて受けた。

一撃目は少々こりつきたながら、これで完全にやられだからなと攻撃を受けた。

が、三撃目はないだろ。

俺は能力を発動させる。

見た目に変化はないが、今の俺はさつきまでに比べ百倍強い。神崎が走つてくるのがゆっくりと見える。

こつちも投げ飛ばしてやると、俺はカウンターに専念していた。最初のときのように拳をいれてこようとするのを俺は避ける。次に掴みかかつてくるのも予想済みだ。

避けようと思えばすべて避けられた。でも、全部避けなかつたのは、次のためだ。

神崎が俺の腕を掴んで最初とまつたく同じように投げ飛ばす。俺は着地の瞬間に両足で踏ん張り、ベンチのように水平で持ちこたえ。思いつき立上がり、神崎の腕を掴んで、同じように投げた。

一応女なのでソファに向かつてだが。

「いてえな、おい。くそ」

身体強化で治癒能力もあがつてるので、擦り傷程度はすべてなくなつている。

それでも、内部にはダメージが残つているのだ。

能力はまだ続いているが、闘う必要もないだろ」と、構えをとく。

「あんた……あたしのドレイになりなさいー。」

なぜか、ソファから跳ね起き、そんなことを言つてきやがつた。

意味が分からぬいが、聞いても意味はわからぬそつだ。

「ディレイでなんだよ……」

「そのままよ

そのままだと理解に苦しむんだが……。

そこら辺をまったく理解していない神崎は頭に手を当て、そちら辺を歩き始めた。

帰つていいか?

俺は傷ついた校長室のドアに向かおうとした瞬間に腕を掴まれる。ちやっかりしてんな。

「あんた、銃は使えるの?」

「使えねーし、この先使う予定もない」

聞いたくせにまったく聞いてほくれない自分勝手さにため息が出た。

「やつぱり基礎程度は学んでおいてもらわないとね……戦闘能力の高さは十分だし、うん分かったわ」

何を満足しているのかは分からぬいが、なんだか雲行きが怪しい。良くないことが起こりそうだ。

今も最悪だが、やらにだ。

「あんた、高校はどうこへつもつ?」

「近くの進学校だ」

「じゃあ、変えなさい。東京武偵高よ」

「似たような会話を前にもしたような気がするのは俺だけか？」

「とにかく、分かった？」

話が通じない。

何度も否定しているが、それも通じないようだ。

否定がダメならここだけは従つて、違う高校に行けばいいだろ？
まだ、後期試験までは申し込みは終わっていないので、変えること
も可能だが武偵高なんて危険な場所には行きたくない。

拳銃・刀剣の携帯が義務付けられているとか妹が嬉しそうに語つ
ていたのを思い出した。

刀剣はまあいい。腕の延長だと思えば。

ただ、拳銃は嫌だ。

一番嫌な記憶は中学生に上がりたてに父親がすつこい強い拳銃
確か、デザートイーグル の使い方を教えてくれて、そして、
派手に頭にぶつけたことがあるのがトラウマだ。

あれやべーな。

撃つた瞬間、拳銃が俺を殺さんばかりに向かってきて頭に直撃し
たんだよ。

相手を倒すのか俺を倒そうとしているのか分からなかつたよ。

幸いたんこぶ程度で済んだんだけど、あれが色濃く残つても
ういやだ。

「あ一分かつた、分かつた。武偵高ね、おーケーおーケー

「釘刺しておくけど、もしも武偵高じゃなかったら、昨日の件につ
いてあたし言いふらすから」

……なんという脅しだ。

俺にはこの脅しを崩す言葉が見つからない。
だつて情報が少なすぎるから。

神崎・H・アリアの言葉の力がどれほどまで人に信用させる事が
できるのか。

俺はその情報を入手しない限り、結局苦労する道を歩まされる。
時間だつてすでにあまりない。

こいつはそれをすべて考えて言ったのか？

そろそろ、願書を出さなきゃいけない。

もしも、もしも、すべてを考えて言ったのなら、こいつは……頭
がいいのかも知れない。

「分かつた……」

頷くしかない。

はつきりと答えを出すのは後でもいいかもしねいが、それでも
武偵高に受けなければいけないかもしねい。

母さんに言つたら喜ばれるだろうか。

親父は泣いて喜び、そして恐怖のデザートイーグルを俺にくれる
かもしねい。

物凄い、嫌だ。

「あたしは色々用があるから一年の三学期から、そつちに編入する
つもりよ」

「は？ 僕を無理やり誘つて、そつちは自分のやりたいことやさんの
か？」

「……今あんたは使い物にならないわよ。戦い方を身につけてか

「うじやなことアンタあたしのドレイなんだからそのぐりこ分かりな
せこよ」

「おー、おー、わーったよ。それじゃ、約束は叶る。武偵高に入学
すりゃいんだろ?」

「アーハ、簡単じゃなこと思ひナビ、やつよ」

神崎はそれだけが言いたかったのか、満足したよつて部屋を出で
行く。

誰が、ドレイになんてなるかよ。

俺は仮に武偵高に入つたとしても、のほほんと暮らすからな。
いつして、嵐は去つていき、その後の校長室で俺はすべてを神崎
の責任にして教室に戻つた。

五話 武偵に俺はなる！

帰つてから、神崎について調べられることを調べてこるひばり、元々、人助けは好き　というか人に喜ばれたりするのは好きだ。

武偵は、金をもらい武偵法の許す範囲で仕事を行つ、何でも屋と
いう存在だ。

戦つたりするだけが仕事でもないよつて、それはそれでいいな
と思った。

はつきつ言わせてもらおう、武偵高に行きたくなつたのだ。
これは神崎の脅しとか関係なしに。
将来小説家となり有名になる俺だ。
いろいろな事を知つておくに越した事はない。

というわけで、家に帰つて部屋に引きこもつていた俺は、今日が
家族全員が集まる日と言つ事であるのも後押しするきっかけとなり、
家族に　妹は呼んだ覚えがないのだがなぜかここにいる　集ま
つともらい全員が集合したのを確認し、宣言する。

「俺、武偵高に行く事にしたから

あつけらかんと言つと両親は目を丸くし、互いに顔を見合させる。
妹はなぜか嬉しそうに笑つていたが、なんだ。俺が死ぬ姿でも想
像してゐるのか？

「神崎さんに会つたらサインもらつてきてね！　観賞用と保存用と
実戦用と自慢用の四つねつ」

お前は俺の心配をしてくれ、あと既に会つてるからな。

もつと早く言つてくれれば……いや面倒だからやめておいた。
というか、そんなもん友達に伝聞しても大した伝聞にならないだ
る。

武道界ではそれなりに人氣があつても普通の世界じゃ神埼ファン
なんてそんなにいないだろ？

「つまよおおおおおおおおおお——。 わすが俺の息子おおお——。」

親父が感涙の涙を流している。

汚すぎる。

大の大人がこんなガキみたいなことをやつていいのだろ？
いやよくない。

俺にこの人の遺伝子が流れていると思つと悲しい気分になつてく
る。

「あなた、とうとう京の胸に正義感が生まれたのよー。」

お父さんとお母さんが抱きしめあつていてます。

なんとなく距離をおきたいです、はい。

それでも、本当に心から嬉しがつてくれている素振りを見せる一
人を見た俺の心は。

嬉しそうな両親を見るのは悪くはないといつ嬉しさがこみ上げて
いた。

それでも、嬉しがつていてるのがばれると恥ずかしい俺はふんと鼻
を鳴らし、

「俺はそれだけを伝えたかつたからな。 少し勉強してくるかい？」

「待つんだ。 後で俺の部屋に来い」

途端に真面目な声をだし、こちらに顔を向ける。

「いつときの親父は八割方俺に面倒なことが起きる前兆だ。
俺は、嫌な予感を感じながらも返事する。

「だったら、今から行きたいんだけど」

面倒事は先に片付けたいんだ。

ショートケーキのイチゴは後に残すタイプだからな。
面倒なスポンジは先に食べるのだ。

「そうか。母さん。夕飯は豪華にできつか?」

「そうだねー。今日は京の旅立ちだからね

旅立ちといわれるとあの世への旅立ちなんじゃないかと考えてしまつ俺は武健高を恐れすぎなのだろうか。

臆病が悪い事ではないと言つておきたい。

「ちよっと、買出しに行つてくるよ

母さんは「よつこりせ」と年寄り臭い声を出して、買い物に出かける準備をし始める。

「私、学校の友達に会いよつ

それで友達がいなくなることを切に願つ。

考えてみる。自分の友達の兄が拳銃振り回すような学校に行くんだ。

普通、怖くて近寄りがたくなるだろ。

あと、下手に学校に知れ渡らないことを祈るだけだ。

止めないのか？と聞かれたら、止めないと答える。

無駄なんだ、あいつが一度言つたことは絶対に実行する。

だから、武僧にあいつもいかはなるはずだ。

二人を見た後、親父が動き出したので、後を追い親父の部屋に踏み入れる。

親父は知り合いに武器を作つたり、メンテナンスをしてくれる奴がいるのでほとんどすべての武器をそいつに預けているので、この部屋は武器庫と化してはいない。

前見たときは酷い有様だったのでよかつたと一安心していると。親父は何か探し始める。

「じゃんじゃじゃーん。俺は昔からずっとお前に渡そうと黙つていた物があるんだ」

タンスの一番下から、何かを取り出していた。箱だ。

渡されるとずしりと重みが手に伝わってくる。
……嫌な予感しかしない。

「名づけて、デザートイーグル！」

それまんまだる名づける必要皆無だろ。

中を開くと恐ろしい、トラウマを復活させる拳銃　デザートトイーグルが顔を見せた。

「俺はな、別に拳銃を持ち歩くつもりはないんだよ

身体強化さえあれば、拳一つで戦うのなんて屁でもない。

使用時間に制限はあるけど、気をつければ大丈夫だと願いたい。

「武偵高は拳銃はつねにもちあるいてなきやこけないぜ？」

痛いところを突かれたが、まだ俺は入学していないんだ。

今から帶銃する必要性もない。そもそもしてはいけないと想つんだが。

それに、

「俺は銃とか嫌いなんだよ」

「なんでだよ。いかすじやねーか。いつグッドラック！」

「……俺は時々あなたが父親なのかどうか疑わしくなるんだが」

「それより、理由はなんだよ？」

あんたが馬鹿な」と言つて脱線したのにそれよつて片付けやがつた。

まあ、いい、いつものことだ。

「こんなもんで簡単に人の命を奪えるからだよ。こんなもんは發明されなきやよかつたんだよ」

いつも思う。

便利になれば、それを悪用する奴がいる。

これはもう世界の公式であるかのように起つてゐる現象だ。

「確かに銃は簡単に人の命を奪えるかもしれないけどよ。逆もあるんだぜ？ 俺はこの銃のおかげでたくさんの命を救えてんだからな」

それでもやつぱり親父は大人だ。

子供っぽい性格は合つてもな。

理想論のような言葉で言い返してくる。

ただ、その言葉だつてそもそも救つた命を脅かしたのが銃かもしれない、と考えたりはしないのだろうか。

それでも、親父は『屈託のない笑みで言つんだ。

たぶん俺が今思つたことを口に出しても「難しい事わかんねーよ！」とか言われて終わるのだ。

俺はデザートイーグルを握り、重みを感じる。

人を救う事ができるという重みを。

「それな、俺の友達に頼んで馬鹿みたいに改造したからな。もしも、使つてるのばれたら即逮捕レベルにな」

「いらんっ！ こんなもん！」

「大丈夫だつて、一応、『銃検』は通つたしな

「『銃検』？」

「この銃使つていよいよつてことだ」

なるほどな。なぜ、逮捕レベルのものが認められているのかは聞いただしが藪蛇だ。

何ができるか分かつたもんじやない。

「簡単に説明するとそれ、デザートイーグルを元に完全に作り直したから正しくはデザートイーグルじゃないぞ名前。言つなれば……」
「ユーデザートイーグル！」

「そのまんま再びかよ……」

「フルオートの三点バースト、マガジン増量により弾は十五発入るからな」

「ふ、フルオート？ 三点バースト？ マガジンは分かるけど連さんは分からないんだが……」

「フルオートはトリガーを引いている間はずっと弾がでるってこと。三点バーストは一度引いたときに三発弾が飛び出るってことだ。通常のデザートイーグルは七発だ」

単純に倍つてことか。

残りのは使えるのか分からぬが。

それにしても、改造つてそんなことできるのか？
むしろ俺はそっちの方面で武偵を目指したいな。
なんか危険少なそうだし。面白そうだし。

「威力は？」

単純にあの恐ろしい反動さえなければ嬉しいなと思い、訊いたの
だがすぐに聞かなければよかつたと後悔した。

「一発がデザートイーグルの倍くらいだな

「俺の頭に拳銃が埋まるじゃねえか！」

単純計算での衝撃も倍つてことになるはずだ。

そんなもん、喰らつたら、俺は一人餅つきを始める事になるぞー？

「そもそも、フルオートとか三点バーストとか意味あるのか？ 弹の消費が早くなるだけなきがするが……」

「いや、俺が可能な限り強くしてくれつていつたらそうなつたんだ。威力も半端ないから当たり所によつては防弾服着ても死ぬかもねけりけら笑う」二つの顔に拳を叩き込んでいいかと神に尋ねている。

神の許可は下りそうもないし、下りたとしても親父に攻撃を当たられるか疑問だらけだが。

「せめて、威力だけは下げてくれよ……」

そんな物騒なもん持ち歩きたくもない。

「ええー。まあ、俺も悪ノリしちまつたけどさ、しゃーねー。後で頼んでくる。他に欲しい物あるか？」

どうせ使うなら、拳銃はあれがいいな。
なんだっけ……なんかのゲームでてきた。
ガンブレードについてた気がすんだが。

確かその主人公が最初に使つてた武器がリボルバーだった気がする。

リボルバー式拳銃とかいうのがあるんじゃなかつたか？

「リボルバー式のがいい

「却下」

「なんでだよ！」

即答された親父に詰め寄るが、親父はひつちつと指を振る。

「リボルバーは護身用の方がいいんだ。確かに使いやすいという奴もいると思うが襲う 強襲になると自動式拳銃 オートマチックのほうがいろいろ便利なんだ。まあ、俺の自論なんだけどな」「どうだ？」

親父が頭良く見えるときはこういった拳銃に関するとき、戦闘などを真に受けるなら正しいのだろう。心配な面がないわけでもないが。

「だったら、デザートイーグルはやめてくれないか？ 見ただけで頭の中に昔の映像が……」

さりに飛躍して、撃った瞬間に頭部に拳銃が埋まるまで進化した映像が今横切った。

「昔？ ああ、俺が適当に教えたときのか

「俺は今あんたを殺したいほど憎んだがいいか？」

一瞬で親父に掴みかかる。

親父はいやあと頭をかきやがるので余計に俺の怒りを増幅させる。

「あん時は悪かったな。まあ、気にすんな

「気にしまくつてんだよ！」

「うおつー 反抗期つ

「今の状況はどんな温和な奴でも切れるわつー」

本当に親父といると体力を使う。

友達なんていないから分からないが、友達がいるとこんな感じなのかもしれない。

それを親相手に感じたくはなかつたが。

「わーつたよ。んじや、夕飯できるまでは俺が稽古つけてやるつじやないか」

「本気でやつていいのかよ?」

家族で唯一俺の能力について知つてるので不敵に笑つて見せる
と。

「いへら田舎されたからつてな、それだけじや、俺には勝てねえぞ」

「んじやあ、やつてやる

俺は憂さ晴らしにちょうどいこと思ひながら外に向かつた。
五分後にはぶつ倒れていたぜ 俺が。

番外編 二話の続お メインストーリーとは関係ありません。読まなくても問題ない

とつあえず四日ほど書けない分一気に書きました。

誤字あるかもしませんが報告してくれると嬉しいです。

メインストーリーとは関係ないので読まなくとも問題はありません。

「わあ、大人が道路のど真ん中で寝てるっ！」

俺が道の真ん中で大の字の態勢で寝ると、子供の声がした。
大人……？

俺は中学生だが、身長がでかいから間違えられたのか。
ここは人通りが少なく、交通量も対してないような場所だ。
なぜ、この道を通ってるかは知らないがちょうどいい。

「子供、俺が100円やるから、ちょっと手を貸してくれ」

「えっ！　いいのか！　よし、待つてろ！」

子供はそういう言ひ方で俺を一生懸命引っ張り起こしてくれる。
よほど、100円がほしいのか俺は起き上がるこことが出来た。
眩暈がしてたがそれも落ち着いてきた。

「ほり、100円だ」

財布から100円をとりだす。

「やったあつ！」

ひやつほーと元気がいい。

100円で喜べるなんて子供という生き物はすごいな。

「ああ、そうだ」

「ん?」

「お金上げるからちよつといつこでとか言われてもつこいつたら
黙だからな」

さつきの今でこの子の身を案じて言つておぐ。

「なんで? お金くれるいい人じゃないの?」

「違うんだ。あぶないんだ。そういう人についてつたり殺されちゃ
うかもしれないからな」

「えええつー?」

「分かつたな。分かつたら、この道は通るな。人がいっぱいいると
こを通れ」

「でも、この道友達の家に近いんだよ?」

「急がば回れだ。危険がある道を通るのは黙だ。もしも通るなら
その100円は返してもらひうど」

「……分かつたよ」

男の子はしげしげ頷く。

これで、未来に起きる事件が一つ防げたと考えれば100円はな
んて安いものなのだろう。

俺は携帯を開き、先程とつた車を少年に見せる。

「この車見なかつた?」

黒塗りの怪しい車だ。誰でも見たら「んん?」と疑るよつなものだ。

「んん? 見たぞ」

「ビニでだ?」

「向こうの交差点で止まつてた。ビニに行つたかは分かんないけど」

「ありがとな」

そういうしてゐ間に人が少ない道から出た。

少年とはそこで別れ、少年が教えてくれた交差点に向かう。人は中々いて、店も結構ある。

待ち合わせに適した場所もあり、事実誰かを待つてゐるのかあちこちに人がいる。

もしもここにずっといる人がいるなら絶対に見たはずだ。

俺は近くにいた二人組みの同じ年くらいの女子に話しかける。

「あんたらに聞きたい事があるんだけど……」

話しかけると、一人は人見知りなのか俺の顔を見た瞬間に体を震わせる。

俺の顔が怖かつたという理由ではないと願いたい。

その子を庇うように強気そうな女子が俺を睨みながら言つ。

「ナンパなら他に行きなさい。私たちは友達を待つてるんです」

「誰が、ナンパなんかするか。この写真に写つてる車知らないか?」

俺は携帯を一人に見えるように向ける。

強気な女はまだナンパと勘違いしているのか警戒したまま。すると、後ろで怯えていた女が手をあげる。

「その、車。見ました」

周りの雑踏に搔き消されそうな、消え入りそうな声を俺の耳はつきりと拾つた。

「どこに行つた！？」

つい、言葉に力が入つてしまつ。
女はひいつと悲鳴をあげて、それを見ていた強気女が皿を吊り上げる。

「あんた、この子は氣弱なんだから丁寧に扱いなさいよ

「物かよ……」

なんだろう。割れ物注意とか貼られているのだろうか？

「黙りなさいよつー」

俺の呟きを聞き、蹴りをかましてくる。

なんて凶暴なんだ。ライオンだ、こいつ。

又はクマでもいい。

「大丈夫だよ。その車は向こうに行きました」

女が指を差した方角は昔の家がたくさんあるほうだ。

古い木の家がたくさんあり、俺は落ち着いて結構好きな場所でもある。

が、中には廃墟になり、そのまま放置されているような危険な区域もある。

廃病院なんかもありこの街の心霊スポットとしても知られている。はつきり言つと、ロクテナシのたまり場にするには最高の場所である。

「ありがとな」

一応微笑み、礼を言つと、女はぼつと顔を染める。
熱でも、でてるのか？

今日は日照りが強いのもあるから体が弱そうなこいつなら仕方ないかもしねない。

「用が済んだならわざと行きなさいよ」と強気女が言つたので、
氣弱女が途中で倒れないことを切に願つ。
離れようとした瞬間、

「よひ、姉ちゃん。俺たちと遊ばなーい？」

茶髪なキャラ男四人組みが二人に話しかけていた。
本物のナンパだな。

「俺たち四人で何でも奢るよ？ 不快にはさせないからせ」

もう既にその態度が不快そうだぞ。

強気女は嫌そうに顔をゆがめる。

話しかけた男はこのチームのリーダーなのか、髪がツンツンしまくの針のような髪をした男が強気女に絡む。

さりげなく肩を組もうとしたのを強気女が払つ。

「私達、友達と約束してるんです」

「男？ 女？」

「おん……男です」

女つて言おうとしたのを慌てて男と言い換えたよつだ。
確かにナンパした男たちは女同士で遊んでいたと思つてのことだ
うつ。

言い返し、だがナンパしてる奴は大抵お頭おつまが悪い。

「その男よりも、絶対に楽しいからやあ～」

今度は違う奴がでしゃばつてきている。

強気女は喧嘩けんかつぱやいのか拳を震わせている。

俺も忙しいのに 仕方ない止めてやるか。

「あのー。その一人を俺の待ち合わせてた人なんですけど……」

二人を守るように間に割り込み、俺が穏やかな顔で言った。
妹曰く俺が穏やかな顔をしてるときが何が起こるか分かったもん
じやないと一番怖いらしい。

「あ”ん？」

女に接する笑顔ではなく、威嚇する形相だ。
相手の身長はかなりでかい。俺が175くらいだったが、それよりも頭一つ分大きいので180は超えているかもしれない。

よく見ると、このチャラ男軍団は身長で見分けがつく。

今俺と対面してるこいつが一番大きく、他の三人は全員身長が近いというわけではなく、目の前のこいつを特大とするなら特大、大、中、小と分けられる。

特大が俺にキスでもするつもりなのか半端なく顔を近づけてくる。

「てめえ、痛い目みたくなかったら女置いてさつさと帰れや」

確かに。気弱女には礼があるが強気女に蹴られた分でチャラなはずだ。

それでも、困っている人は俺の関わりのある人間なら助けてしまうのが俺なのだ。

ああ、偉いなあ俺。

「てめえ一人でこの子たちが満足すると思つてんのか？ 見た目は俺ほどかっこよくねえしさ」

俺ほど、ということは多少かつこいいのか俺は？

こんなナルシストに褒められても全く嬉しくないし、むしろ吐き気が。

「四人だとどう考えても多いだろ。采配ミスだろ。せめて同じ数にしろよ」

「てめえ、うつせえんだよつ！」

今思つたがこいつは「てめえ」で切り出すのがマイブームかなんかなのか？

うざいんでやめてもらいたい。

俺の胸倉を掴み、睨んでくる。

後ろに控えてる二人も仲良く睨んでくる。

「マジ殺されてえのか！？」「..

「いっは、脅す相手を間違えている。

今、俺は大きな事件に立ち向かおうとしている最中だ。

相手はどんな武器を持つてこむかは知らないが少なくともこつらよりは強いはずだ。

……そつだ、こつら時間を取り戻している場合ぢやない。

「うせんだよ。シンシン野郎。シンシンをせるならバスターーで、ぐい持ちやがれ

「ああ？ 意味わからねえ」と言ひてんじやねえぞー。」

俺の肩をじついたので、わざと思いつきつ倒れる。

「へ？」

俺は肩を押されて、うずくまる。

「いーー。まじいーー。折れた、絶対折れた」

「てめえ、棒読みでふざけたこと言ひてんじやねえー。」

俺は立ち上がり、埃を払いコホンと咳払い。

「見逃してやつてもいいぜ？」

「ふざけんなよー。」

喧嘩つぱやいのはこいつもらしい。

手をあげ、俺を殴ろうとしたので俺は避ける。

勘違いしないでもらいたいが俺はハンドレッドパワーがなくても喧嘩には慣れている。

いや、ハンドレッドパワーのおかげで戦いになれたといったほうがいい。

伸びた腕の手首を握り、捻る。

「いだつ！」と叫んだ男の肩を掴んで膝を入れる。

極大男は腹を押さえてうずくまる。

「さて、残りの三人は？ どいつから倒されたいのか言つてくれ」

俺がにっこり微笑むと残りの三人は極大男を抱えて「失礼しましたー！」と叫んで逃げていった。

てっきり極大男は置いてけぼりで逃げるのかと思ったがちゃんと連れて行くんだな。

俺は腕時計を見る。

事件が起きてから既に30分ほどが経っている。

今頃身代金を要求されているかも知れない。

「お前等、見た目だけは可愛いんだから気をつけろよ」

つたく余計なことに時間を取られた。
俺は一人の返事を聞かずに氣弱女が教えてくれた方向に走つて行く。
途中人を捕まえてさらに敵の居所を探つていくと。
結構すぐに見つかった。

車が一台、止まっている。

一つは俺が見たものと同じ、番号も同じで、もう一つは番号は違

うが車は同じ物だ。

「さて、中に入るか」

建物は……汚い。

元々は倉庫かなにかなのか、中は広い。
ゴミなどもそこら辺に散らかしたまま、やりたい放題だ。
というか、あつさり入れたのだが……警戒していないのか?
中を進んでいく。

極力、足音は出さないように進んでいくと。
いた。

縄で縛つて動けなくされた少女が犯人を睨みつけていた。
その少女を囲つてた犯人が一、二……五人か。

全員少女を見て、げらげらと下卑た笑いを浮かべている。
気持ち悪いな、あいつら口リコンだな。

とりあえず、こちらを見ている人間は一人もない。
だったら、仕掛けるか。

俺は腕時計でアラームを四分五十五秒後にセットする。
五分後には切れるまで戦うと危険だからだ。
よし、始めだっ！

能力発動と共に時計を押し、走り出す。

少女に一番近い、俺を殴りやがった一名を蹴り飛ばし少女を救出。
お姫様抱っこでだ。

かつこ悪い俺がやると似合わないがな。

「なつ！」

蹴られた男を見てか、それとも突然俺がいたことに驚いたのか声
があがる。

用は済んだ、後は警察でも呼んで終いだ。

と、思つていたが、こいつら中々反応が速かつた。全員が即座に臨戦態勢を取つて拳銃を抜いていた。簡単に拳銃つてのは手に入るのな。

のん気に対応しているが、しかし現状はあまりよろしくない。四方から向けられる、四つの拳銃。

「動くなよ、兄ちゃん」

気持ち悪い笑みを巧みに使いこなす男。

気持ち悪く顔を合わせたくない俺はそつと顔を天井に向ける。どこか足場がないかと探すためにだ。

一応はあるな。

端の方にだが、作業用で組まれた不安定そうな物だが。

「お、お兄ちゃん。やばいです」

俺の腕のなかでがたがたと震えている少女に、

「ちょっと、ジャンプするからしつかりつかまれ

俺が教えると、「ククリ。

震えながらも首を何度も上下させる。

確認ができたので、男どもが「人質を返せ」とか言つて来るのを左から右に流して、思いつき飛ぶ。

誘拐犯は驚き、発砲を忘れてくれたのは幸いだ。

高さ三十メートルほどあるそこに降り立ち、少女を下ろす。

「あいつらじめてから戻るから……後、警察に連絡しといてくれ。携帯は持つてるよな?」

最近の小学生は携帯の一つや二つ持っている。

ましてや誘拐されるほどの金を持つている少女だ、持っているかは聞くまでもない。

うんと答えるので、こじら付近の住所、黒い車が停まっているのが目印だと教えてから下に戻る。

残りは、一分三十秒程度。

こいつらを倒すなら一分もいらないな。

「てめえ、痛い目見たくなかったらさつと返せやつー。」

俺の恐怖をあおるためにか、拳銃を何度も印象付けるように振る。チラと興味なさそうに視線を送り、

「おまえからな」

俺は、そう言って一人目の懐に移動して殴る。

すぐさま、一人目、三人目、四人目と流れるよろこびに攻撃して。

十秒も経たずに壊滅させた。

これで、一件落着だな。

少女を降ろしてから、警察に連絡したのを確認して犯人を縛り上げる。

その後、やつてきた警察に顔はばれたくなかったが仕方なく事情を説明。能力を伏せて説明したせいで、厳重注意された。何でも危険だかららしい。

仕事で忙しかった両親が駆けつけてきて無事だ。

「お兄ちゃん、ありがとうございます」

ペニシリと頭を下げる少女。すっかり暗くなつた外で両親が待つて
いる中礼を言いに来てくれた。

もひ、何度も言われているが感謝されるのは悪くない。

「今度からはもう少し安全な遊びにしてくれ……」

「ひびきだされた俺だが父親の名前を出した瞬間にすぐさま解
放された。

親父怖い。

「あー！ わ兄ちゃんと遊んであげるの忘れていました！」

「待て、なぜ上から目線なんだ？」

「今日はもう無理なので、携帯のアドレス交換していくぞ！」

「嫌だ、もう関わり合いたくない

「もう、シンデレですねー」

少女があまりにもしつこいで携帯を投げ渡す。
赤外線で交換しているようだ。

「はい、終わりました」

少女に手渡される。

満面の笑みを浮かべている。今日の事件はまるでなかつたようだ。
俺は携帯を操作して登録されている名前を確認して書き直す。
面倒な少女と改名して、ふと、気づいた。

俺の携帯にはその人の情報を細かく書いたりできるんだ。

で、そこ的情報には近くのお嬢様が行く中学校名が書かれていた。

お嬢様校なのは分かる。でもチュウガク？

俺は、喜びを表現するぐるぐるダンスを踊っている少女に、携帯を振るわせながら、

「お、お前……中学生？」

「……バカにしました？」

「何歳だ？」

「一四です」

不機嫌そうな顔で、言った少女。

「……もつと身長伸ばせ」

俺は世界の恐ろしさに絶望しながら言った。

「つてことがあつたんだよ

興味津々に絵本の読み聞かせを聞くよつた態度の妹に説明してやると、。

妹は、

「……妄想？」

といつて馬鹿にしました。

六話 武偵高の入学試験に行ける気がしない

「それでは、今からお前に死んでもらいます」

なんで、なんで俺は、こんなに不幸体質なんだ。

俺に向けられる拳銃。

今日は武偵高校入学試験日。

俺も試験を受けるために学校に向かっているときに、事件は起きた。

犯罪者が暴れまわっているのだ、同じバスの中で。
武偵高へは専用のバスが出ており、それに乗つてレッソングーに向かっている最中なのに。

その犯罪者は俺を見て、真っ先に気に食わないと拳銃を向けてきたんだ。

前にもこんなことなかつたか？

俺はそれをつまらないといった視線で見つめていると、

「やめろッ！」

誰か知らないが男の腕を掴んで、そのまま捻る。あつと犯人は悲鳴をあげて、適当に乱射する。正直能力を使わずに助かつたと感謝している。

このバスには俺と同じで武偵になろうとしている人間が多数乗っている。

中には中学のときから学んでいたやつもいるので、放つておけば事件は解決するのだ。

犯人の目的は知らんが、おおかた武偵に恨みを持つてでも武偵には敵わないから武偵見習いを殺してやろッ！とか言つやからんだろう。

迷惑な話だ。

武偵が他人に恨まれてもしかたのないものだから仕方ないといえば仕方ないのかもしけないがな。

犯人は勇敢な男に締め上げられて、そこでゲームオーバー。縛られて、終了だ。

ご苦労なこつた。

全員が拍手をして、犯人を捕まえた男もまんざらではないよう日照れている。

周りに自分のほうが優れているというアピールができたじゃないか、よかつたな。

それにもしても俺は犯罪者に気に食わないと思われる顔なのだろうか？

明らかに多くないか。

今度からはもう少しどうにか狙われないようにしないといけないと改めて、とりあえず休む。

と、犯人がくくくと笑い声を上げ始めるものだから俺もゆっくりと眠っていることが出来ない。

「つるさいぞつ」

勇敢な男が咎めると今度は高笑いを浮かべる。

「超能力者をご存知ですか、見習い諸君」

俺は首を傾げていたが、隣に座っていた 隣に座つてたんだ

勇敢な男はハツとして、即座に胸に手を突っ込む。

「武偵を超えた存在ですよつ」

男は縄を何かで斬つた。

俺が目を見張っていると、何かが飛んできた。

俺はそれを紙一重で避けると後ろの窓ガラスがはじけ飛ぶ。

勇敢な男は肩にかすつたようで肩を押されてうずくまっていた。

俺は割れた窓ガラスに視線をやると……水か？

窓がぬれていた。

「これが超能力です」

ふわっと腕を振ると、水のレーザーがこちらに向かってくる。

俺はそれをハンドレッドパワーを使ってガードする。

「死ね死ね死ね！」

男は、近くにいた女に向かって手を向ける。
女は驚き動くのが遅れたのか、避けられそうにない。
くそ、なんで俺がこんなことせにやあかんのだ。
思いつきり飛び、女と男の間に入って庇う。

「おい、大丈夫か。女」

「は、はい」

俺は即座に振り返り男の腹に拳を入れる。

ぶによつと手ごたえがないが、このままバスの外まで行つてやる。
走り出して、入り口のドアにぶつかりそのまま一緒に外に出る。
分断に成功だ。

「中々の力をお持ちですね。くく面白い」

「うちは面白くねーんだよ。さしあと決める」

俺の手は水でぬれていた。

俺のパンチを予め水を張ることによってガードしたのか。

厄介だな。

俺は防御されないよう高速で動いて男の後ろに回り、蹴りを入れる。

が、男は俺のスピードがあることに気づいていたのか全方位を水のバリアで守ることにより簡単に防御されてしまう。

そして、蹴つたばしょの水が膨らんだと思つたらレーザーのよう

に俺を吹き飛ばす。

痛くはないが、まじで厄介だ。

「くくくくく。武僧見習いでここまで強いとは、将来が楽しみですね」

「絶賛将来を邪魔されそつだがな」

俺は制服の裏側に入れて一丁の拳銃を抜き出す。

俺はデザートイーグルとレーサージクシューターという拳銃を持っている。

前者は実在するもので後者は実在しない。

そして今はレーサージクシューター レサを抜き出した。

親父が「魔法みてーなのにぶつけると一瞬だけ焼き消すんだぜ」と自負していたもので、なにやら拳銃自体に特殊な加工をしているそうだ。

魔法みたいなのは超能力のことだろ？

まじでちゃんと説明しろよな。

俺はフルオートモードで全弾発射。

「効きませんよ」

男は水のバリアを張つたので、計画通りだ。

俺の銃弾15発が水のバリアに当たる。

当たつた箇所すべてがガラスのように割れる。

それはほんの一瞬だが、俺には十分だった。

飛び込み、ぶん殴る。

バリアは半分ほど修復されていたがそれもろとも殴り飛ばした。能力も、切れた。

「どうだ、こんちくしょー」

さすがに疲れた 精神面でな。

俺はせめて道に邪魔にならない すでにかなりの邪魔になつているが ように近くの路地裏に向かう。

あいつの身柄は警察のほうでどうにかしてくれるだらう。それよりも……今は逃げないと。

初めから、俺と男の戦いを監視しているやつがいた。

敵は……一人じやなかつたんだな。

俺は腕につけているワイヤーを発射できる機械 腕輪とよく勘違いされる を使い上に飛ぶ。

これも武僧になるならワイヤーアクションの一つや二つできなきやなどということで親父にもらつたものだ。

全く、こんなものを作る親父の友達というものを見てみたい。

親父の話だと、気に入った仕事しか受けず世界的な大発見 超能力の能力を一瞬だけなくすのは世界的な大発見でそれが公表されれば超能力者が涙目らしい も特に公表せずに親父にのみ試させる変わり者らしい。

そして……俺のことを偉く気に入っているらしい。

あーいやだいやだ。

と、目の前に誰かが降り立つた。

「まさかばれるとほね。ふふふ」

くくくの次はふふふか。

しかも今度は女。

ふふふ女は右手をこちらに向ける。

俺は嫌な予感がしたので横に飛ぶと、俺がいた場所には何かが通過した。

今度は……風か。

厄介すぎるな。能力もなしに一回戦目に突入か。

俺はデザートイーグルを抜き、一発放つ。

カタガヒンマガル！

威力は親父が初めて見せたときと変わらず、やばい。

車なら一瞬で大破しそうな威力の拳銃弾は不可視の壁に阻まれる。それでも一瞬埋まったのを見ると、デザートイーグルの威力は伊達ではないようだ。

「なんていう馬鹿みたいな威力を持つた拳銃だ。ふふふ」

俺は何かいつてらつしゅる婦人の言葉を無視して隣の屋上にワイヤーを打つて地面に着地。

ワイヤーはバンジージャンプの補助のような使い方をさせてもらつた、

着地の際に多少足が痛んだのは氣にして入られない。能力が回復するまでにげねーと。

「逃がさないわよ。ふふふ」

しつけーんだよ。

俺は逃げながら、デザートイーグルを放ちそのたびに痛みに耐え

るという行為を続けて、稼いだ十分。

「やつてやるぜっ！」

俺は出し惜しみなく能力を発動させる。

急に立ち向かってきた俺を見て、わずかにいぶかしむ。

「なるほどね。時間に関係する力のようね。ふふふ」

「ああ、そうや。だけどこうなれば俺は無敵だ」

レサを取り出して三点バーストで発射する。

女はそれを見てまた風で防御して……一発が肩口にあたりよろける。

防弾服で助かつたな。

俺は空いた穴を見て拳を叩き込んで一人目を撃退する。
まだ、いるな。

あと一人いるが、俺の能力を知つてか襲い掛かつてこない。

俺はとにかく狙われないために遠くまで走つて逃げた。

武偵高に逃げ込むという方法も考えたが、迷惑になりそうなのでやめた。

武偵高の入学試験が受かるか受からないかの以前に受けられるか、受けられないか分からなくなつたな。

七話 入学はバスだ

俺ははるか遠くまで逃げた。

まだ人工浮島にはいるが、それでも撒けたはずだ。

「俺から逃げられると思つてゐるのか」

大剣を持った男が俺の前に現れた。

俺はちつと舌打ちして、デザートイーグルを構える。

二丁拳銃で行きたいが両手に銃持つてたらリロードができないのでバス。

それに仕留めるならこれで十分だ。

「いぐぞー！」

男は威圧的な声をあげて、俺に大剣の切つ先を向けた突進を仕掛けてくる。

「ぐつ」

俺はなんとか避けて、空いている左手で拳を作り男の即頭部を殴りうとするが避けられ、剣の腹で殴り飛ばされる。

壁に背中をぶつけたよ。

ワイヤーを使って近くの建物の屋上に逃げる。つてジャンプして追いかけてきやがった。

俺はデザートイーグルを一発撃ち、打ちひしがれる。

男は大剣でガードするが、俺の銃弾の威力にまけ吹き飛ばされる。全く、常識はずれな威力だ。

残り五分ほど稼げば俺の勝ちだ。

と、俺の弱点を知つたな。

一対一を何度もやられると手のつかなくなこと言つことだ。

もう少し生身の状態でも戦えるようにならないとな。

男はすぐさま、俺に突撃を繰り返す。

俺はすべて紙一重で避けて時折攻撃をして避けられるを繰り返している。

「おうひー。」

バンッ！

デザートイーグルから放たれた銃弾は男の大剣を吹き飛ばす。やつたと思つたら、男は細身の長剣をどこからか取り出して繰り返し攻撃を仕掛けてくる。

それより、なんでこいつは拳銃を使わないんだ。

いや、使われたら勝てる気がしないが今は感謝しよう。

何度もぎりぎりで避けていたが時々、致命傷ではない程度にダメージを受ける。

そして、時間だ。

能力、発動だ。

「喰らいやがれっ！」

俺は渾身のスピードで男に拳を叩き込む。

男はそれでも反応して長剣を間に挟んだが、俺はあっさり壊して

男の顔面に拳を入れた。

当てる瞬間に腕を引いて加減はしたので大丈夫なはずだ。

「さて、なんで俺を狙ったのか教えてもらおつか」

「アンタはある人の依頼で武偵高に入れると言われている」

「アンタはある人の依頼で武偵高に入れると言われている」

「はあ？」

「アンタが入ることによりすべての歯車はずれて、そしてあの子の未来も変わる。あの人はそう言っていた」

「意味わからんねーけど」

「とにかくだ、お前が武偵高に入つていいのは一年からだ。分かつたら大人しく一般高に行け」

「てめーに命令される理由はねーけど……」

腕時計を見る。

今から武偵高まで向かつたら合計一時間近くの遅刻だ。

武偵は時間に対してもルーズであるのはよくないということで遅刻したら即座に不合格と親父が言つていた。

つまり、正當な理由があつたとしても俺はもう無理なわけで。まあ、いいか。

こんな犯罪者と戦うような日々に足突っ込んでも疲れるだけだ。能力のほうもたとえアリアにばらされたとしてももうどうでもいいや。

武偵高のバスの中のやつらにはばれているんだからな。

「わーったよ。俺はこのまま帰る……面倒くせーしな」

俺は男を無視して、まだ残り五秒程度のハンドレッドパワーで近

くの駅まで走つていつた。

八話 能力のための兵器（前書き）

次回からようやく原作に入ります。
ヒロインは未定ですがアリア以外の誰かにしようと思っています。

八話 能力のための兵器

「受けないつー!?」

家に帰ると、妹からついお説教を受けた。

「つむさいな、こいつだつていろいろ理由があんだよ。

「今日ははすき焼きだつたんだよつー!? 私も転校するし、兄さんも会格するからつー!」

「まだ、俺は試験を受けに言つただけだ……つて、へ?」

「何、アホみたいな声だしてんのよ」

さつきから俺よりも偉そうに振舞つてこるのも気になるが、それは置いてとこ。

「転校つてどこのだよ」

「武徳高付属中学に決まつてるよ

「……おめ

俺は水面下でそんなことがあつたとは露知らず、口から魂が飛び出る気分だった。

「おめじやないー！ 兄さんはまだいるのー！」

「俺は適当に再募集してるとこを探して行くよ

「武偵高には入らないのつ！？」 編入とかもあるでしょつー。」

「ああ……じゃあ、一年からね

「なんでそんな無気力なのよ」

「これが俺だしな」

「……つー もう知らないから」

妹はそう言つてどこかに消えてしまった。

心配させたのだろうか。

俺は父と母に報告をして、疲れた体を癒すために布団に入った。
何も言つてこないというのは一番体に堪えるんだな。

父も母もなにも言わずに温かい目で見やがつた。

俺は一般の高校に入学した。

何もない、事件も何もな。

ただ、二年生からは武偵高に移るつもりだ。
すでに編入試験を受ける予定はできている。
もつと早くても良かつたが、キリがいいじゃないか。

妹は武偵中学で優秀な成績をおさめてインターーンとして武偵高に入つたらしい。

同時期に入つた女友達で確か……間宮あかりとかい女の子も一緒

に入っているらしい。

時々家につれてきやがるのはやめてもらいたい。
妹の友達と会う兄の気持ち 複雑すぎる。

間宮はいい子だからいいがな。

あと、妹とは俺が武偵高に落ちて以来ほとんど口を聞いていない。
寂しいものだ。

学校の授業はつまらなくはないが、楽しくもない。

俺は、いつのまにか武偵高に行きたないと心から願っていたんだな。
あと、近況報告のついでにすごいものを手に入れたので書いておこう。

親父の友達に能力について話して、いろいろ指導してもらった。
能力のないときは、パワードスーツを着れば問題はないといわれた。

このパワードスーツ親父の友達が何かのアニメをモデルにして作つたらしいが、オリジナルに改造されすぎていて俺には何が元だったのか分からぬ。

他の人も分からぬだろうといつていたので特に気にはならない。
このパワードスーツとにかくすごい。

着ていれば平常時の身体能力も2倍近くまであげてくれる。

能力発動時は特に効果はないが平常時に上るのは嬉しい。

さらに腕の部分にはワイヤーを放出させる道具もついている。

モード変更をするとその部分から水が出たり炎が出たりと何でもできる。

マヨネーズも出るらしい、出したくはないが。

防弾、防刃はもちろんのこと、防火、防水、防電、なんでもおちやのこさいさいらしい。

……あの人は何者なのだろうか。

表舞台に経つた瞬間、日本に科学革命が起ころな。

あと、俺の能力が終了する時間なども教えてくれたりするしな。

ステッスを着るときは携帯に似た機械に俺が指でタッチすれば着れ

る。

なんでもスースを情報化して携帯に似た機械に入れて、俺がタッチすることにより物質化されると言ひ半端なく高度な科学技術が行使されていて、俺には理解不能だ。

この機械と親父の友達が持つてゐる機械が繋がつていて、転送とかでもできるらしい。

いつでもどこでも着れるらしいが、俺には着れない理由があるのだ。

それは、一回使つたびにメンテナンスがいて、かなりの金がかかること。

気にせず使つていいと親父の友達には言われてゐるが、気にするわつ！

一回で百万近い金が飛ぶんだぞつ！　おいそれと使えるか！
結果拳銃からは卒業できなさそうです。

つと日記に愚痴と自慢を書きすぎたな。
後で、消しておくか。

明日は編入試験だしな。

九話 入学

「松島京です。今年から入学しました。色々わからぬーところとかはあるけどよろしくお願ひします」

あたりさわりのない挨拶だ。

俺は武徳高でもなるべく田陰で過ごしてこきたいと思つていたから変にアレンジして目立ちたくない。

武徳高に入つたのも意地みたいなところが大きい。

「はいはーい！ しつともんでもえーす！ きょーくんの好みのタイプは？」

誰だ、あの女。

金色のツインテールの髪。

やけに身長は小さいが胸が異常にでかい。

口リ？

俺は質問の意味は分かつたが、答えられるような質問ではなかつた。

好きな女なんていねーし考えたこともない。

一般の高校生からはずれている自覚がある。

「特にない。少なくともうるさいのは嫌いだな」

神崎とか、この女のような積極的なのは苦手だな。

結構流されやすいからな、俺。

周りに合わせるのを心がけているからそんな性格になつっていた。

「ぶうーぶうー冷たい転入生だなあ

自覚してゐるがはつきり言つた。

俺の言い方が悪かったようで、クラスは完全に静まり返つてゐる。
俺が席に座ろうとした時に教室のドアが開く。
遅刻か。

特に気にせずに俺は席に座ろうとしていたが、

「京？」

「……最悪だ」

きょとんとした目で現れた女 神崎。
神崎と同じクラスとは……人生真つ暗だな。

「アンタ、武偵高にいたんだ」

「正確には、今年から編入したんだよ」

「どー?」

「探偵科だ」

「……なんですよ」

「面白そつだからだ」

「アンタはあたしと組むためにいるのよー。」

「勝手に俺の存在意義を決めんな……つてなんだこの視線?」

クラス中から好奇の視線が突き刺さる。
ここから見回すと一人だけこっちを見ようとはしない男がいることに気づいた。

俺はあいつと気が合ったんだな。

一人でいる時間が多そうな男だつた。

見た目で判断するのはいけないとは思つよ。

「ねーねーきょーくふつてどんな関係なの?」

さつきの女がずいづいと身を寄せてくる。

女の匂いが、異様なまでにして俺は顔を背ける。

女の匂いは何か苦手だな。

逃げよつ。

俺は教室から飛び出せつと、入り口に掛けて走るが、

「アンタ、もう逃がさないわよつ!」

神崎が田の前に来て、俺の腕をつかんで背負い投げの要領で投げやがつた。

思いつたり背中を打つ俺は受身なんかとれない。

「ぐほつ。ふやけんなよ、お前」

いきなり投げるなんてどんな精神状態の女だ。

「あなたはあたしのドレイイなの。分かつた?」

指立てて、俺に注意してくる。

俺は慌てて、クラスを見回す。

みんながさらに興味津々の表情で……やばい、完全に誤解されて

い。

「きょーくんって……M?」

「ふざけるな。それときょーくんて誰のせやねん。女子で呼べ」

「今やうだよー」

けらけらとが似合う笑い方でからかい続ける女。

神崎は神崎でハテナと首を傾げているし……もう、嫌だこの学校。
一日目で不登校になるぞ、おい。

俺はすべての現実から逃げるように目を閉じた。
なんか、その後に発砲音とか聞こえたけど知らん。
ギヤー、ギヤー騒がれていた氣もするが勝手にやつてや。

十話 遠山キンジ

授業のレベルは……低っ！

前行つていった高校は進学校であつたので偏差値もそこそこだった。
こいつちが低すぎるのか？

俺の高校が高かったのか？

「おい」

俺の席の近くから声がする。

俺は顔をあげると、最初にみた一人でいる男だ。
目つきが悪く、何て表現したらいいのだろうか……。

「ネクラだ」

「……ぶしつけな言い方だな」

男ははあと額に手をやり、「朝も面倒でこれからさらに面倒になり
そうだ」と言つ。

「何か用か？」

「お前今日寮に引っ越すのか？」

「ああ」

「ならたぶんお前が俺のルームメイトになるんだろうな」

「そりなのかな？ 確か四人部屋を一人で使つてる奴が同じ部屋の相

手で、ネクラで社交性がなくて名前が遠山キンジとかいう奴だったな

「俺だ、全部あてはまってる」

「やーい、ネクラ」

「うるせえ。それよりも少し話したいことがあるんだが、二三日やなんだ。屋上に行かないか？」

「面倒だが、仕方ない。ついていくやる」

俺はよいしょと重い腰をあげて、遠山についていく。

朝の神崎の鬱憤をほらすために、綺麗な校舎を汚すように歩く。「校舎を簡単に案内しながら連れて行ってくれると嬉しいんだが

「……分かった」

それから、簡単に説明を受けてこると屋上につくる。

「で、話つてなんだ？」

「それはな」

言にびりり、深刻そうに頬を搔く。

「……恋の告白か、生憎そつちの趣味はねえ」

俺は全力で後ろに後退する。

バック走なら誰にも負ける自信はないね。

「俺もだ！ 違う。聞きたいことは神崎・H・アリアのことだ」

「神崎？」

気でもあるのか？

見た目はネクラなようだが……案外意外な面があるんだな。
俺は面白そうなネタを見つけてもう少し耳を傾けてやることにする。

「ああ。お前仲が良さそうだったから……少しでも情報をくれると嬉しいんだが」

「大したことは知らないぞ。俺は不幸にもあいつに田をつかられてるだけの男だからな」

「お、お前もか？」

「つまり、おまえもか？」

俺は恋愛の話じやなくて残念ではあったが、今度は違う意味で興味が湧いてくる。

神崎に苦しめられる中の同士、仲良くやれるかもな。

「ああ、朝にちょっと事件があつてなそれでだ」

遠山は詳しこと話をすつもりはないようだ。
俺としても興味はなかった。

「俺も事件があつたときここに巻き込まれてそれでだ

「同じ境遇だ」

遠山がポツリと漏りす。

「つまり、俺たちは大した情報は得られないところだな
一人とも神崎のことを詳しく知らないのだ。だから、これ以上ここで話していくても無駄だな。

「だが、同じ境遇の人間がいるところとは相談はできるな」

俺が、納得したよついで遠山は「そうだな」と頷く。

「やあそろ飯でも食いに行くか

俺の提案に遠山は時計を確認する。

「確かに早めに行こうとしたことはないな

遠山は屋上の出口に引きましたが、そのままと俺をつれて物陰に隠れる。

なんだなんだ。

「やあぱつぱつの趣味が……」

「ねえーよー クラスの女子だ」

「…………」

女子たちは色々好き勝手に話している。

俺と遠山はそれを置物のようにきく。

初めは遠山の話だつたが、神崎の話に変わる。

陰口みたいな物言いは俺にとつて不快でしかなかった。

陰口は嫌いだ、昔俺は能力の制御が出来ないときといじめにあつたからな。

バケモノだと。

だから、俺は遠山の制止もきかずに飛び出す。

まさか、人がいるとは思つてもいなかつたのか女子たちは口をあんぐりと開ける。

カナブンでも持つてたら放り込んでいるかもな。

「おい、陰口を言つのはあんまり放つておけないぞ」

「あ、あんたは編入生の……」

「友達がいなのは言わなくともわかる。だがな……あれ?」

俺は勢いで飛び出したところがある。

というか勢い以外では飛び出していない。

神崎を庇う理由は俺と似たような状況におかれていったからだ。

庇う言葉が見つからない。

あいつ……いいとこあつたか?

いきなり投げ飛ばしてくる。殴る、蹴る。

暴力のバーゲンセールな女だ。

「いや、陰口はよくないな。でも庇う言葉も見つからないから、とりあえずじゃーな」

言つことはない。

俺は屋上から避難したのだった。

十一話 寮生活

寮への引越しをやつと終えた。

本当は春休みのついでやつておけばよかつたのだが、……「ひかり忘れていた。

ま、まあ、誰にも忘れるところはあるのだし、いいよな。新しい四人部屋である方にこの場所はいいな。

「……お前H口本とかそういうものは持っていないよな」

「なんだ、お前は俺の恋人か何かか？ 生憎そういうものはわざわざ好きこのんで見るつもりはない」

「なら、いい」

「……？　お前がホツとする理由が分からぬのだが、……」

「H口の話だ気にしなくていい

「気にになつまくじなんだが

聞くなどいわれてるので下手に詮索するのはやめよつ。俺は中々なソファに腰を下ろして、横になる。

「お茶持つてくれ

「はいはい。って何で俺がそんなことしないといけないんだよ

「一応客だぞ」

「Uの部屋の住民だらうが

「……腹減つたなあ」

「何も出さないぞ」

「ちつ……！」

「なんだこの、横暴ぶりは……」

俺はとりあえず、無視しよう。

キンジ（遠山と呼んだらキンジのほうが分かつやすこと）言われたので仕方なく前にしてやつた（も対面に座り、なにやら考え方をしている。

それにしても今まで一人での部屋にいたのか。
なんてうりやましいんだ。

俺はポケットに入っている二つ買つたか知らないくしゃくしゃなガムを口に放り食べている。

ピンポーン。

ドアチャイムが鳴る。

キンジは聞こえていないようだ、まだ、思考に耽っていた。

学校初日で俺に用があるとは思えないのにわざわざ出たりはしない。

相手を驚かせてしまつ可能性もあるからな。

ピンポンピンポン。

おー、早くでてやれよ。

だが、まだキンジが動く様子はない。

……聞こえてるよな？

又はよほど耳が遠いのか、どちらかだな。

ピポピボピボボピボボボボボーン！

ドアチャイムで何かを演奏しようとしているのか？

迷惑極まりない騒音でよつやくキンジは「うつせえーー」と怒鳴り、玄関に向かっていく。

「耳が遠いって大変なんだな」

「聞こえてるつー！」

キンジは怒鳴りのこしていく。

いやあ、あいつはからかうのが面白いな。

これからもどんどんからかおつ。

どうせキンジの友達だろうから、俺はなるべく邪魔にならないように部屋を移動したほうがいいかもしれない。

俺が配慮して体を起こすと「待て、勝手に入るなー」と怒声がする。

勝手に？

親しくない奴にでもあがつこまれたのか？

俺はこつそりと見ると 神崎つー！？

さつとソファから転げ落ち、ソファの陰に入るようにして神崎の視界に入らないように隠れる。

神崎は特に俺に気づいた様子はなく、窓付近まで移動する。

俺は幸いにもテーブルがあるからいい感じに見えていない。

「 キンジ。あんた、あたしのドレイになりなさい！」

でるにでれねえ……。

話をまとめるとき、キンジの強さに惹かれて、自分のドレイにしたいというわけだな。

ぼーじぼーじ殴られた頭で考えた。

……もしかしてキンジに押しつければ俺の力を狙っていたのがなくなるんじゃないか。

そうすれば武偵高で面白そうな授業を安全に受けられるな。二人の対話を聞き流しながら、俺は自分の作戦をたてる。

「でてけつ！」

突然神埼に蹴り飛ばされたので、俺は啞然とする。

「ちよ、ちよつと待てって、一体何がどうなつて……」

「でていけつ！」

外に蹴り飛ばされ、俺とキンジは寮の前に立ち尽くす。

「アーニー、アーニーだ？」

「な、何も聞いてなかつたのかよ」

「当たり前だ。事情を説明してくれ」

「つまりだ。神崎があの部屋に泊まる」

「お前の事が好きで？」

「は？ ありえん、だろ」

「動搖、してんな」

「してねえーーー。」

「冗談だから別にいいが。

俺はキンジがよくお世話になるところに内側に棲んでいて、そこで時間を潰す。

キンジは立ち読みだけで帰るのは気が引かるとかなんとか言つて、漫画を買つた。

別にんなの気にするなよと思つが……俺の財布が軽くなるわけではないので特に口を出すよくなことじまじない。

寮に帰り中に入る。

神崎は、いない。

帰つたのか？

「お、おこ。アリアの奴。風呂にいるわ！」

キンジが焦つたような口調で言つ。

「よし、覗け」

「死ぬぞ、俺が」

「俺はその間に逃げる。グッデラック！」

「待て、役割を変更しやがれ」

男一人で入浴中の女子の影を見ている。

変態だ。

まあ、俺は全く興味がないので特に問題はない……のか?
問題あるだろ。

「どうあえず、アリアの武器を奪つて隠しておくれ」

そういういや呼び方がアリアなのな。

仲いいなあ。

と、そこには。

……ピン、ポーン……。

慎ましい、性格が現れるようなチャイムが響く。
キンジはやばっと口を半開きにする。

「うわわわわ手が離せないから吐いてくれ」

抑え気味の声をあげながら、神崎の……し、下着を持つてこる。
変態だ、変態だ。

「手、離したほうがいいぞ」

女子の下着など家族以外のは始めてみたが、俺は案外そういうのが苦手らしい。

田を逸らしながら、忠告すると、「いいから、早く出してくれ。問題はないから」というので俺は共同犯と思われたくないの、そこから逃げるよつて玄関へと行く。

「はいはい、と」

ドアを開けると、大和撫子な綺麗な女がいた。

目立つ印象は巫女服を着ている（なんで巫女服?）。

すごい清楚な感じの人で、漂う空気からこの人が温厚な性格なのだと分かる。

どちらかというとアリアよりは、こう落ち着いた感じの方が俺としては接するのがラクだな。

「え……？」

きっとキンジに会いに来たのだろう。

それでキンジではない人間が現れ、戸惑っているのだろう。

俺は相手を警戒させないよう、できればさっそく用を済ませるために、自己紹介をする。

「俺は松島京だ。今日編入してきた。この部屋で過ごすことになつている」

用件だけは伝わつただろうか。

「あ、えっと。そのありがとうございましたー！」

「……？」

何に対する感謝？

「入学試験のとき、バスの中で助けてくれて、ありがとうございましたー！」

「バス？ 助けた？」

記憶にない。

バスと聞けば戦った記憶しかなくって……俺、誰か助けたか。まあ、詳しく詮索するのは今は避けよう。用を聞いてキンジに伝えないとな。

「今、キンジ手が話せないんだ。直接話をなきやいけないことじやなければ俺が伝言しておぐが？」

「あ、えっと……」これ、夕飯を作ったんです。あなたの分はあります
せんが……すいません」

「別にいらないから謝るな」

人の彼女さんの飯にたかるほど傲岸な人間ではない。
ていうか、キンジモテモテだな。

飯を作ってくれる優しい彼女さんはいるし、神崎にもモテてるし。
「それと、今朝の周知メールの件で大丈夫だったか伝えておいてくれますか？」

「ああ、分かった」

周知メールつて俺はよく知らないが武偵高からの連絡みたいなものだつたはずだ。
今朝なにがあつたのか？

「それじゃあ、失礼します」

「ああ、夜道気をつけろよ

俺がドアを閉めて、中に戻る。
ずしりと思い夕飯をリビングに持っていくと、疲れた顔をしたキンジがソファにいた。

「ほら、名前は知らんが女が飯届けに来たぞ。後、周知メールの件で大丈夫だったか聞いてたぞ。メールでも送つておけよ」

「あ、ああ。やっぱり白雪だったか

「さすが、彼氏だ。白雪って名前なのか

「彼氏じゃない。星伽白雪だ」

星伽ね。覚えた。

「彼氏だろ、神崎と同居してるのはまたやましいぞ」

不安感を煽るよつて言つとキンジはむつとした顔で返す。

「彼女じゃない。あいつは幼馴染でやたらと俺の世話を焼きたがる世話を好きなんだよ」

はあと疲れたようにいつキンジは嘘をついているよつては見えない。

……絶対星伽の奴は氣があるだろ。
普通幼馴染がそこまでするわけがないからな。
キンジ、鈍感なのね。

「まあ、俺としてまだいいでもここでさ。せここの面倒がつだ
な」

「……あまつ変な」としなこでくれよ

「分かつてゐるつて

あまりじやないが畠田へかき回してやる。

「あ、あんたたち、何してんのよ」

「アリア……！ なんで下着手に持つてんだよつ……」

キンジが姿に氣づき、怒鳴ると逆にアリアが顔を真っ赤にして怒鳴る。

「なんで……、あたしの下着が廊下に落ちてるのよ……どちらがど
つたのよつ……」

「キンジだ。俺はやめろと言つたんだが、『児童体型の女の子が大
好きなんだー！』とか呟んで風呂場に突っ込んでこつた」

「な、なななな……」

言葉にならない声を出して口をあわあわと動かしまくる。

体全体が赤いんじゃないかといふばかりに赤くして、頭のてっぺんからはやかんの湯気の如く煙を危険信号のよつて出していった。

逃げよつ。

俺はそう思つて、ソルトナガキブリのよつた動きで神崎の視線を氣にしながら移動する。

「アンタも、同罪よ！」

俺に向かつてとび蹴りをしてきたので、親父との特訓を思い出して神崎を親父に見立てて、避ける。

「……こんな場所で親父の地獄の特訓がいきるなんて。

「待てっ！」

キンジは後ろだからな！

俺は先に寮を飛び出て、玄関を力強く押す。
神崎がどかどかとドアを壊さんばかりに蹴るがそれでも耐える。
やがて、神崎は俺を追うのをあきらめたのか、音がしなくなる。
ついで、キンジでも狙いにいったのだらつ。

パパンッ キン。

ドアに発砲音がしたんだが……気のせいだよな？
ドアが防弾性だったのか銃弾はこちらに衝撃だけを伝えているが。
つか、なんであいつは武器を持つてんだよー キンジはどうした
……まさか、死んだ？

「アンタ、いい加減出てきなさい。今なら命だけはとらないであげるから」

命だけって、キンジは？

「じゃあ、武器を捨てろッ！ 僕に戦つ意志はないからな」

「拳銃がなかつたらあなたを殴りやつて痛めつけるのよ」

ひいっ……。

能力を使って、逃げるか？

でも、怒りが治まらない限り俺が部屋に帰つてくることができない。

「神崎、何か好きな食い物あるか？」

「はあ？ ももまんよ、それがどうしたのよ」

「買つてきてやる。いくらでもな。だから、拳銃を降ろせ

「……ば、買収されないわよ。十個買つてこなければ…」

「買う、何個でも買つてきてやるから

「分かったわ、制限時間は十分よ。さつあと行きなさい」

俺は能力を発動して、近くのコンビニをハシゴしてももまんを集めて神崎の怒りを静めたのだ。

十三話 兄妹喧嘩

次の日は探偵科で授業を受けて、寮に帰ろうとしていた。

キンジから、『アリア』に付きまとわれてる、助けて』とメールが届いたが無視する。

俺は神崎の情報を得るために、妹に会いに行こうと思つていたが……会いたくなかった。

妹は俺が武偵高に落ちた（正確には受けていないのだが）ことですっかり幻滅して、以降会話をほとんどしなくなった。

そもそも妹は武偵高付属中学に転校して、さらに寮に住んだので疎遠になるのも無理はないが、あきらかに俺を下に見るようになつた。

つまり……あいたくなつてわけだ。

強襲科にいるのは知つていて、神崎も同じく強襲科らしいが……そちらは今は問題はない。

キンジと一緒にデート中だしな。

俺は強襲科の前に来ている。

「さて、入るか」

一応自由履修でとつておいたので問題はないだろう。

俺がドアを開けると一斉に視線が集まる。

「お、おい編入生だ」「まじかよ……」と言つた会話が聞こえる。編入生が、それも一般高からの珍しいらしい。

中学ならまだしも高校にあがれば編入生の試験は難しい。

それも学年があがればあがるほどに。

高校から入るということは、よほど優れていないとできない。

戦い方の基礎、などは既に知つていなければ他の人に呑ませることができないからだ。

だから、編入した生徒は一目置かれる」とになる。どうでもいいが。

静まり返った空氣の中、目的の人物を見つけることになる。妹も気づいたようだが、「ちつ」と舌打ちをひとつ。

「随分な挨拶だな」

「何？ そつちから来るなんて珍しいじゃん」

棘のある態度に俺が肩を竦めていると、背の高いボーネールの女の子と、見覚えのある確か名前は 間宮あかりといつ子が俺を見てひそひそ会話をする。

「なあ、アイツって確かに編入生だよな。妹って知り合いなのか？」

「ええと、知り合いといつか……」

事情を知っている間宮は「俺に話してもいいんですか？」と田線で訴えてくる。

俺は構わんと頷く。

そちらの話は置いておこう。

「神崎の情報をくれ

「……何、その上から田線。アリアさんに興味深々なの？」

「変な誤解を持つなよ。俺はあいつから逃げるために情報がほしいんだよ」

「昨日アリアさんと仲がいってこと私初めて知ったよ。どこで知

り合ったの？」「

「それは、なあ……別にどこだつていいだろ。お前に話す必要なんかない」

俺は、少しいらだつて、相手が怒るような言葉を選択してしまつ。妹は予想通り、怒り、ホルスターにしまつてある拳銃を抜き、俺の心臓に向ける。

「人に聞いておいて、自分は何も話さないんだ。兄さんはいつもそうだ。大事なことは隠してる」

「……誰にだつて話したくない」との一つや二つあるだろつ

ついつい、イライラして俺は語調を強める。妹もそれに乗っかってくる。

「だつたら、アリアさんのこと話したくない」とだから話さないつ！

「なんでだよつ！ わがまま言つくなよ！」

「それは兄さんだつてそつでしょつ……」

俺たちがどんどんエスカレートしていく、妹がとつとう発砲した。俺の腹部に直撃して、俺は体をくねらせて後ろに飛ぶ。まじで、キレたぞ。

俺は立ち上がり、能力を発動させよつとしたとき。

「つむせえぞ！」

突然怒鳴られ頭をぶん殴られる。

殴つたのは、女だ。

強襲科の先生なのか……？

半端ない、威力で殴りやがって頭蓋骨が割れたらどうするんだ。

「てめえらの仲がいいのを見せびらかすなやー！」

女が殴つてくれたおかげで頭は冷えた。

俺はもう、妹に用はなくなつたので、強襲科から出ることにする。
くそ、結局何の情報も手に入らなかつたじやないか。

十四話 こちつわ

俺はそれから毎日こちつわと生活していた。
妹がなぜそこまで怒っているのか理由が分からぬ。

「あんた、聞いてるの？」

神崎が田の前で顔を覗き込むよつこしてていたので驚き、顔を後ろにひく。

「それで、今日ね……」

とまた、強襲科での話をし始める。

キンジは帰つてくるのが遅い。

そういうえば理子に情報収集を頼んだとか言つてていたな。

俺に初めに絡んできた女子が峰理子らしい。

峰ね、ああいうのは苦手だ。

もちろん神崎もだ。

神崎の話を上の空で聞き流していく、キンジが帰つてくる。

俺はまるでいいかのようにキンジと神崎の会話が繰り広げられる。

よし、役目は終えたみたいだ。

俺はソファにごりんとなり、一人の会話で重要な場所だけを拾つていく。

そこで、キンジはなにやら今は無理だという意味深な言葉を残す。何でも強くなるには条件が必要らしい。

条件、ね。

チャリジャックのとき、俺はどうやってキンジが活躍したのか知らないのでいまこち条件を追求することができない。

俺みたいに自分でオンできない力なのか。
大変だな。

「分かつた、一度だけ強襲科に戻つてやる」

ええ！？

途中からキンジの力にばかり考えを膨らましていたので、話を聞いていなかつた。

なんで、そうなるんだ？

「じゃあ、あんたも来なさい。一人とも一度だけいいからあたしとパーティーを組みなさい」

どうやら、一度だけパーティーを組むから戻るという意味らしい。
俺は強襲科に戻りたくなかつたので、「嫌だ」と言つた。

「なんですよ」

「昨日、俺は既に行つたんだよ。それで、とある事情で行きたくない
い」

「何よ、とある事情つて」

「妹がいるんだよ。そこで昨日喧嘩したから行きたくない」

「ふーん。なら、あたしと一度だけパーティーを組むのはいいわよね。それでいいわ」

意外と物分りがよくなつてている。

たぶんキンジが肯定的な答えをくれたから機嫌がいいんだね。

「な、なら、俺もそれで」

「アンタは駄目よ」

キンジも俺と同じ条件にしたいようだが、無理だった。
神崎はそのまま、荷物を持ってあっさりと男子寮を後にした。

「お前、妹いたのか」

「ああ」

「ちょっと聞きたい」とがあるんだが

「俺の妹のスリーサイズは知らないぞ」

「んな」とじやねえよ…

妹を見るのは時々だけだが、結構大人っぽくなつてたな。
悪い虫がつかないことを祈るだけだ。

「お前が、アリアに目をつけられたのはなんなんだ？」

「……まあ、隠すほどでもないけどな。昔銀行強盗があつて、それを俺がぶちのめしたら偶然にも神崎に見られたんだよ。そんで、それからだ」

「へえ」

「うでもよせねうだな。

なり聞くなど俺はキンギに田瀆しきしてやつた。

十五話 峰理子

次の日は、探偵科で普通に授業を受ける。よく、分からん。

「きょーくーん！」

寮に帰ろうとしたら、峰に出くわした。
能力を使ってでも逃げたいが、その前に抱きつかれる。
むにゅんと大きな胸が腕に押し付けられ、さらに甘ったるい匂い
が鼻孔をくすぐる。

「こいつは要注意人物だ。

女との関係なんて男と大して変わらないだろうと思っていたが、
それは違った。

女は苦手だな。

俺は振り払い、峰から距離をとる。

「なんだよ。俺は忙しいんだ、帰つたら寝たいからな

やつと神崎がいなくななり平和になつたのだから、平和を謳歌した
い。

峰はくふふと笑い、「じゃじゃーん」とか言つて俺の顔が映つて
る写真などを取り出す。

「これはなんでしょう。」

そこに映つているのは、俺が銀行強盗をぶちのめしたときの写真
だった。

仮面をつけるまえのものまである。

「それがどうしたんだ」

努めて冷静に言つたつもりだが、峰は見逃さなかつた。

「これなぜか全然見ることができなくて大変だつたけど、理子は△ランク武健。頑張つたんだよ」

「……こんなこと力を入れるなよ」

「いーじゅん。編入生のこと知りたかったんだよお」

むにゅとわざとらしく胸を押し付け、しなだれかかつてくれる。俺は、ぱつとまた距離を取る。

「どうか、この情報は親父が消しといてくれたはずだ。だから、今まで特に問題なく過ぎさせていたのだが……うわ、なんでこんなところにあるんだよ。」

「さらば、いーれ

理子はわざと『眞を地面に落とす。

俺がそれを拾い上げると、きゅぴんと田を輝かせ俺の背中に飛び乗つてくる。

「ち、離れひつー。」

俺が体を左右に振るが、半端ない力だ腕を絡ませてきて解く」とが出来ない。

俺はとりあえず、背中に感じる柔らかい、男を駄田にする感触を意識しないために『眞に田を落とす。

それは、俺が入学試験のときに戦つた写真があった。三人と戦う写真が色々なアングルから撮られている。……なんで、だ？

「これが、ばら撒いてほしくなかつたら理子の言つことを聞いてほしいなあー？」

俺は、なるべく温厚に過ぐしたい。

さらに、今は神崎に目をつけられているのだ。

銀行の件だけでも神崎にあそこまで実力を認められているんだ。もしもここにあるすべての写真が神崎の手に移れば、俺はもう何の言い訳もできずに神崎に四六時中つけられてしまつ。ここには従つておいたほうがいいな。

「なんだよ、言つ」とつて。あまり変な内容じやなければきいてやる

「うーん。難しいことじやないよ。ただ、あまり一人に関わらないで言いたいかな」

「一人？ キンジと神崎か？」

「そつ、あの一人は、あの一人だからこそ意味があるんだよ。そこに邪魔が入つたら理子の考えが狂つちゃうもん」

「考え方？ 狂う？ お前の頭は元々狂つてるだろ」

俺はほいつと思いつきり前かがみになると峰は前転の如く前に落ちてくれた。

「どうしても女の子と一緒にいたいなら理子がいてあげるよ？」

からかうように耳に息を吹きかけながら言ひ。

ぞくつと背筋に変なものが走る

「生憎、どうでもいい。それに、次に事件があればそこで普段の俺の実力を見て神崎を幻滅させる。それで、関係は終わりだ。キンジと決めたからな」

「へえ……。そっか、じゃあ、この写真は私がもつとくね。じゃ一ねー！」

なんだつたんだ、あいつ。

俺は、体中に残る甘い香りを嗅がないように鼻を手でつまみ、とつと寮に戻りシャワーを浴びた。

十六話 バスジャック

「寝坊だつ！」

キンジの野郎、俺を起こさずに行きやがった。

腕時計を見ると現在時刻は八時四十分ほど。

自転車を持つてない俺はバスで通学するのが基本なのだが、今からじや絶対に間に合わない。

携帯を確認すると、メールとたくさんの方の電話がかかってきていることが分かつた。

電話のあいでは……暴君 神崎か。

ディスプレイに表示された暴君という文字を確認して、メールを見る。

暴君で名前を登録しているのは俺の平和を乱している神崎へのせめての抵抗だ。

『事件が起きた。今すぐに女子寮の屋上へ来なさい。一いちで〇装備は準備させたから』

このメールが十五分ほどまえに来ている。

つまり、今さら遅いだろ。

周知メールも來ていたので確認すると、内容は武慎高の生徒を乗せたバスがジャックされたというものだった。

……ぶ、物騒だ。

俺は嫌々に武慎高の制服に腕を通してから、行くかと寮を出る。ただ、俺には場所が分からぬ。とりあえず高い場所に上るか。

雨が振っている陰鬱な天氣の中、俺はワイヤーを駆使して高い建物に上がつて探す。すると遠くにヘリが飛んでいるのわかる。

あれは、たぶん今回の事件に関係する物だろう。

何かを追うように飛行しているので、俺は仕方なく能力を使い思いつきり跳んだ。

近くまで、足とワイヤーを使って向かつて、都心に向かつてるぞあのバス。レインボーブリッジに入る前に俺はへりに向かつてワイヤーを伸ばしてそのままジャンプして乗り込む。

「じょ、状況は？」

中にいた少女は狙撃銃のスコープから顔を外しこちらも見る。

「まだ、状況に変化はありません」

それだけ言ってふたたびスコープを覗く。
邪魔してはいけないな。
と、下で銃声がする。

俺は飛び下りて、全力で走りバスにワイヤーを放つ。

つて、邪魔だこの車つ！

俺は真っ赤な車が俺とバスの間を通せんぼのように割り込んできたのでそれを飛び越え蹴り壊す。
さすがに足がちょっといたいが思いつき横転する。
俺はバスの上に飛び乗ると、

「京！？ どうして、つーか今どうやってきたんだよ

「詳しことはいいから、爆弾は？」

「まだだ、アリアが俺を庇つて怪我して……」

「みりや分かるつて。俺は爆弾処理なんぞできないぞ、適当にひつちぎつて海にでも投げればいいのか？」

「そんな簡単じゃねーよ。へそ、ビツすればいいんだ」

キンジが思考を開始したので俺は黙る。
といふか、能力が切れちまた。

バスにワイヤーを打ち込んで落ちないようこじつからつと捕まつ、
後はキンジに任せると考えていると。

銃声。

それはバスの底の部分で悲鳴をあげる。
バスの底の部分に、数発せらるに弾をヒットさせると、爆弾りしき
ものが海に落ちていき。
耳に響く轟音をあげて、爆発した。
事件は、解決したようだ。

十七話 事件解決

バスジャック以降、神崎とはあつてない。

退院の日である、日曜日にあまりにもキンジが落ち込んでいたので気晴らしに出かけて、出かけた先で神崎に出会い、いろいろな情報もらつた。

神崎が戦う理由は母親の無実を証明するためだからだ。

無実なのにイ・ウーとかいう連中にほめられて、刑務所での生活を送つてゐるらしい。

同情はしたな。家族に自由に会えないのはつらいに決まつてゐる。だから、まあ、俺も暇なときは神崎を手伝ひながらはしごつと窓つたね。

そんな休みが明けた、月曜日。

特に何もなく、一日も終わりはあと寮でじゅうじゅうこと寝てゐる

と、携帯が俺を呼ぶ。

なんだだらう。

ディスプレイを見ると、遠山ネクラ。

キンジか。

「なんだ？ 家に帰つてこないなら、俺は店に夕飯を食べに行くからな」

『羽田空港に来いつ！ 第一ターミナルで合流だッ！ 頼む来てく
れ！』

切羽詰つたように、キンジが言つので、俺は疑問符を浮かべながら制服に腕を通す。

ただならぬ状況だけは分かるので、寮を出ながら電話を続ける。

「つまり、『どうして』ことだ?」

俺が改めて聞くと、状況を説明する。

神崎が乗るはずの飛行機を『武偵殺し』が狙つてい『いりし』。だから、一緒に来てくれと言つただが……。

分かった。神崎がピンチなのは分かった。一応礼もあるので助けに行くことに抵抗心はないが……『武偵殺し』って何?

俺は初めて聞くそのフレーズに疑問符を浮かべながら能力を発動させで一気に跳んだ。

いくら俺の身体能力が高くても、キンジから連絡を貰つて二十分ほどが経つてしまった。

俺はどの飛行機がそうなのか、分からず、キンジを探していくが……見つからない。

「あの、ロンドン行きの飛行機はどこですか?」

「ああ、それなら今飛びますね」

「なつー?」

俺の視界で走り出す飛行機。

……無理つすね。

一応キンジに、メールを送る。
『『『めんちやい。遅れました。てへつ』
う、うぜえええ。

俺にこんなメールが届いたら、送った相手を切り裂くな。

まあ、届くのはあとでだろ？と思うので、いいか。

ぴつと送信すると、すぐにメールが返ってくる。

はやっ！と思つて開いてみると……なんだこれは！？

妹が捕まつて『写真が届く』。

手と足を縛られた妹の隣には仮面をつけた犯人のような男が。続いて、妹の携帯番号で電話がかかる。

「もしもし」

『聞こえてるか？ アンタも随分と馬鹿だな。イ・ウーに喧嘩を売るなんてな』

「イ・ウーがなんだか、知らないが……わざと場所を教える。ぶちのめしてやるから」

『場所お？ 写真みてねーのかよ。お前の寮の近くの空き地だらうが。あーあ、つまんねーなあ。さつさとこねーと殺すからな。三十分だ。三十分で来い』

「ちつ、それまで待つてろよ」

俺は電話を切り、すぐ外に出て、能力を使って走る。ワイヤーを駆使して一気に戻る。

時間は大してかかっていない。

能力が切れてからもワイヤーを駆使してさつきよりも早く帰ってきた。

おかげで疲れた。

「来てやつたぞ」

「兄さんっ！」

妹が涙目で、俺の名を呼ぶ。

ふざけやがつて、仮面野郎。

妹が泣くなんて滅多にないことだらうが 明日雨になつたらどうするんだ。

「くははは、随分と疲れてるみたいだな。びつした？」

「生憎、羽田まで行つてたからな。それより、覚悟はできんどううな」

俺がファイティングポーズをとるとせりて面白げに笑つ。

「やつてみるがいい。俺に勝てるのならな」

男は、瞬間消えた。

氣づいたら顔面を殴られていた。

「はつはつまつ！」

右に左に現れては消え、消えては現れる。

圧倒的なスピード差に俺はこのままでは勝てないと能力を発動させる。

途端、男のスピードが一気に遅くなり、俺は向かってくる男へ、相手のパンチを喰らいながら思いきり腹にぶち込んでやる。堅い。

腹に何か入れているのか、簡単に攻撃は通らなかつたが今まで壊した。

「下手な子が居てんなよ」

「なるほどね、確かに強い。だが、俺にはありとあらゆる力がある。まずは……」

「させむかつー。」

どがつとチヨップをくらわせる。
くらつた男はあがつとよろめく。
加減したけどよく耐えたな。

「はつー。」

男は、電撃を放つてくる。

俺はそれを横に飛び、すぐさま男を殴り飛ばさうとする。手に痺れたような痛みが伝わってくる。

電撃か。

前に戦つた奴らのようこ、自分の周囲をバリアのようなもので守つているらしい。

俺はすかさずレサを抜き、発砲するが、避けられる。
なにと俺が驚いた目で見ると、面白そうに解説をする。

「簡単だ。雷を使って自身の体に流れる電気信号を操れば素早く動ける」

そういうて俺から距離をとり、雷を放つてくる。

俺はすべて、避けて男に攻撃をしかけるが雷でガードされる。
全く通用しない。

俺はデザートイーグルも持ち、一丁で一気に叩き込むが、レサの

拳銃弾だけをすべて雷で逸らして避けられる。

「いつ、レサの能力を知っている?」

「何で、レサが危険なのを知っているのか気になるが、てめえ、逃げてんなよ」

男は妹を抱えながら、どんどん離れていく。
くそうざい。

俺もそろそろ能力が切れそつなのでさつと決めたいのだが、全くチャンスがない。

「アンタの能力も時間が関係するんだろ?だから、こうして時間を稼いでいるんだ。ちゃんと強くなってる時間を確認しながらな」

ストップウォッチを見せてくる。

あの野郎、ゲームか何かのように俺を遊びやがって。

その後も何度も攻撃を仕掛けるが、ダメージを「える」とはない。

「ほら、ほら!」

男は一つの蛇のような雷を放つてぐるが俺は一つを避け、二つ目を回避することが出来なかつた。

そのまま、倒れる。

妹の「兄さんっ!」という悲鳴を遠くに聞きながら。

「なるほど、約四分三十秒がアンタの能力発動時間か……つまりないな」

俺が電撃を浴びたことで、気絶したと思っていたのだろう。
近づいて、来て妹を地面に落とす。

「こいつを殺して、首でも持ち帰るか」

男は金属が擦れる音をあげて、そして……。

「兄さん、目覚まして逃げてっ！」

「誰が逃げるかー！」

俺は起き上がり、男に頭突きを喰らわせる。
さらに拳を放ち、残りの時間を思いつきりだけど死なない程度に殴り続ける。

「どうだ」

数秒後には体をたんごぶで埋めた男ができる。
俺は妹の拘束を外してやり、頭を撫でる。
妹は恥ずかしそうに顔を赤くして、

「兄さん。私は助けてもらわなくとも大丈夫だからっ！」

「へ？」

「バカバーカ！ 兄さんなんて大嫌いだからっ！」

「へ？ 今、俺悪いことしたか？」

妹は肩を震えさせて雨の中どこかに行ってしまう。
きっと寮に帰つたのだろうが……俺はよく分からなかつたがこの男を教務科に引き渡しに行つたのだった。

事件は解決した。

飛行機のほうも、俺のほうも。

あの後キンジを乗せた飛行機は『武偵殺し』を撃退して、そして、
後は知らん。

これは学校にいったさいに聞いた話で、今飛行機は空を飛んでる
ことだろう。

着陸する場所がなくて困ってるらしい。

だが、俺の知ったこっちゃない。

向こうは向こうでなんとかするだろう。

俺は連発で使った能力のせいだ大分疲労が溜まっていることに今
さらながらに気づき、ソファに横になった。

十八話 ハペローグのようなもの

「てめえ、なんで俺が苦労してるときに寝てんだよつー！」

田覚ましはキンジの肘鉄だった。

鳩尾にヒットして、俺は喉元にせりあがつてくる胃の中のものを必死に押さえて田を覚ます。

「神崎と、キンジか。俺だつて向かつたがな、色々事件があつたんだよ。見逃してくれ」

ぼりぼりのキンジと神崎はあきれたよつに俺を見ている。
確かにお前等の事件に比べたら俺の件は小事こと思つかもしれないがな、こつちだつて大変だつたんだぞ。

「二人とも、無事だつたようだな」

まあ、さして心配はしていないが。

キンジは何か秘めた力を持つてるし、神崎は殺しても死ななうだしな。

俺はおきたついでにトイイレに向かう。
リビングに戻ろうと思ったが、なにやら深刻な雰囲気が漂つていいるので近づくことが憚られる。

……このままトイイレで時間を潰そう。
そう思つてると、神崎が「じゃーね」と玄関を開ける音がしたので、代わりに俺がリビングに行く。

「どうした？」

「あ、ああ。アリアがロンドンに帰るらしい」

「それで、センチメンタルになってるのか？」

「違う、なんか足音がしない」

「神崎のか？」

「玄関の前で止まっているよつな……」

キンジは自分の考えを確かめる。

俺は後をついていくと、玄関の外から泣き声がする。

「泣いてるみたいだな」

俺が口にすると、キンジは「ああ」と漏らしておぼつかない足取り動く。

それから、なにやら紙を取り出す。

俺が質問するよりも先にキンジが口火を切る。

「聞いてくれ」

「なんだよ」

「俺は来年には一般高に転校しようと思っていたんだ。これはそのための書類だ。だけどアリアのことが頭から離れないんだ。このままいつを行かせていいのか、分からなんだ」

キンジは顔を戸惑いの表情で支配させ、俺に意見を求めてきた。

俺は、面倒だなど思いながらも、最善だと考えられる言葉を伝え

る。

「追いかけたいなら追いかければいいだ。あいつはお前をパートナーとして認めたんだ。パートナーならわがままくらに言つても問題ない。それにお前はあいつのことを呼び戻したいんだろ。ひとつこ行つてこい。後でうじうじされると迷惑だ」

「……行つてくる

キンジは飛び出す。

俺はドアも閉めずに行きやがったあいつを微笑ましく思ひながら、ドアを閉めてソファに横になる。
何かに一生懸命になる、か。

俺にもいつか、みつかるのだろうか。
それにしても、武徳高に入った瞬間こんなに事件に巻き込まれるとは……この学校は呪われてるのか？

ソファで寝ていたら、

「起きなさいっ！

前とは違つ、衝撃の強さに俺は涙が飛び出でた。

「か、んざわ……俺、死んじゃつ

「アンタもあたしのパートナーなのよつー!? 何、まーとしてんの

よ。ほり、やつをひるべー。」

「何でだよ」

「ハリー・アップ！」

誰だ、神崎を呼び戻しに行きやがったのは。
誰も寮にまで連れてこいなんていつてないぞ。

「そういうや、理子がお前のことをオルメスって言っていたけどなん
なんだ？」

キンジが、疲れた顔で神崎に尋ねると、「はあっー？」と神崎が
アホな声をあげる。

俺にしたらオルメスとか、理子とか色々ツッコミたいところがあ
るので、キンジに訊く。

「なんで、理子がでてくるんだ？」

「あー、それはだな」

言つていいくのか、悪いのか迷つたように頬をかく。

「『武僧殺し』は理子だったのよ

へえー……えええええつー？

「マジで？ あの間抜けそな面した奴がか？」

「やうよ

ええつ！？ つい、ことは俺に警告したのは、飛行機で神崎とキ
ンジと戦うために？

そこまで、考えているのだとしたら……恐ろしい奴だな。
俺が理子が犯人ということに驚いていると、一人の会話が進み。

「あたしが、ホームズ四世だからよ」

「「はあつー?」」

また、驚きの声をあげてしまつ。
さつきからなんなんだこいつは。
俺は驚きすぎて容量を超えてしまつ。

「キンジ、こいつなんで部屋にいるんだ？」

「まだ、『武僧殺し』を捕まえてないからだそりだ」

「もう、いいよ。俺がそのうちこの部屋出でていってやるからな」

「それだけはやめてくれ。アリアと一緒に部屋なんて考えただけで」

「最高か？」

「最悪だつ！」

「なによ、一人ともつぶさいわね」

神崎がいぶかしんでみてくるので「何でもない」といつて、場を
和ます。

キンジは携帯を見て、ひいこつと呟つ。

「どうした？」

「ぶ、武装巫女がくる。全員逃げろー。」

「なんだ?」「なによ?」

巫女って、星伽とかいうやつか?

確かあいつはキンジに気があったよな。

あいつが今のこの状況をみたら、修羅場だな。

逃げておこつ。

俺は寝室に逃げると、同時にドアを斬り破る音が。

一人の悲鳴が聞こえるが　聞こえないふりをして頭から布団を被つた。

十九話 勘違い

あれから、俺は寝て、おきたら部屋はボロボロで、よく分からないうちに学校に来ていて昼飯になつていった。

きっと、俺が無意識のうちに覚えていてはいけないと感じて忘れただろう。

だから、もう何も思い出さないようにしよう。

昼飯をキンジたちに誘われたがやんわりと断つておいた。だって、キンジの友達もいるんだ。

友達の友達は友達、なんていえるほどに俺は社交的ではない。

せつかくの友達同士、相手がいい奴らなのはキンジと仲がいい時点で分かるが、俺は変に輪を乱さないようになつこう。

というか、あいつは強襲科の連中にも一目おかれてるしで……なんだかんだで校内では慕われてるよな。

となると、俺は本格的に友達のいない、寂しいやつになるな。妹はあの事件のあとから異常なまでに避けるしで、学校に居場所はないね。

最近、神崎とキンジも妙に仲が良かつたし。

……ハイジャックのときに何かあつたな。

まあ、関係ないか。

と、適当に買つてきたパンをたべて歩いていると、あれ以降顔を出していなかつた星伽のやつが妙に気落ちした感じで前方にいた。無視しようと思ったが、なんだか気になつたので、話しかけてしまつた。

「星伽」

「……きんちやああん」

涙交じつでキンジの名を呼んでいた。

「おこ、起きる、朝だぞ」

匂だがな。

そのままだとどうかにぶつかりついで危険だ。

「つむ、あぶなつ」

今、段差に引っかかるでけりになつたので肩を掴んで支えてやる。

「え……京くん？」

「悪かつたな、キンちゃんじゃなくて」

「う、うひさ別」

あきらかにがっかりしているな。

それにしても、キンジの奴も気がないならはつきりすればいいのに。

星伽は絶対密かに狙つてゐるし。

神崎もきっとキンジの事気になつているだろいしな。

「神崎とキンジは特にこれといって何かがあったわけではないはずだからお前にもチャンスはあるんじゃないのか?」

なんで、人にアドバイスなんかしてゐんだろうーな。
暇つぶしにはなるので、いいか。

「え？」

「つまり、キンジは神崎のこと好きとかじゃないみたいだから、た
とえ神崎がキンジのこと好きだとしても、お前が先にキンジを奪え
ば問題ないだろ」

「え、ええええ！ なにいつてるのー！」

あわあわと星伽は顔を真っ赤にしている。

「あー、馬鹿だ！」とか叫んでどこか飛んでいたぞ。精神的な

戻つてこい、目立つから。

「俺としても、神崎とキンジが愛し合つるのは困るんだ」

あそこは一心庵の部屋でもあるからだ。

一人が愛し合つてたら俺は部屋に帰りたくないくなる。

「も、もももしかして、京くんはアリアのこと好きなの？」

「いや、せん

「じゃ、じゃあ、私がキンちゃんを絶対奪うね。それで、それで京くんも頑張ってください、よつなう！」

「おーっ！ 何勝手に暴走して話ややこしくしてるんだっ！」

弁解はする暇もなく一気にまくし立ててどこかに消えていった。
……まあ、誤解されたとしてもあいつの性格だ、誰かに話したり
はしないだろうからいいか。

俺は、さつさとそのことを忘れて教室に戻つていった。

本当に、いい暇つぶしになつた。

人助けしたあとは気持ちがすがすがしいぜ。

一十話 巻き込まれを逃れる

最近、神崎による被害がなくて喜んでいた俺だったが。

学校に行っている最中にいきなり神崎から刀の峰で脳天をかちわらんばかりに殴られた。

なにすんだよと怒ると、これから毎日襲撃するからと黙って残して去つていったのだ。

放課後になつた、俺はキンジとともに痛む頭を押さえながらなぜこんなことになつてているのか話していた。

「よつは、訓練つてことか？」

「うじいな。アリア様はよくわからん」

キンジが馬鹿にするように様づけて呼んでいた。

俺は愚痴をキンジに言つようとして漏らす。

「最近、神崎には目をつけられていなかつたのに……」

「やついえば、ハイジャック以降俺へのドレイ・宣言が増えたよつたな……」

「よかつたあ。ハイジャックの撃退に参加してたら俺まで巻き込まれてたな」

「まさか、それでこなかつたのか？」

「俺だつて事件に巻き込まれてたつ一つの」

「知ってるけどさ。つまり、アリアはお前より俺のほうが使えると思つて俺に構つことが増えたってわけだな」

キンジはきらーんと田を光らせ、作戦を考えている。
い、嫌な予感しかしないだ。
と、ちゅうじやこに神崎がやつてくる。

「また、待ち伏せか」

キンジが疲れたようにため息を吐く。
確かに、毎日のように会つてこいるのに帰りまで見かけるのは精神的につらい。

「なんだか、京と一緒になのを久しぶりに見たわね」

「生憎、俺は一人を避けてるからな」

「どういつ意味よつー！」

「面倒事はこいつなんだよ。そんで何か用か？」

「帰るわよ」

神崎はそういうて、キンジの隣に行く。

ほつー。無意識なのかもしれないが、キンジの隣を選択したといふことは俺よりも気を許している証拠だな。
やっぱ、面白そうだな。

「おい、アリア、朝練に京も参加させないか？」

「そりいえば、そりね。京の力も戦闘時にあがつていたわね。京も
二重人格のかしら……」

キンジの野郎。自分で巻き込まれていてのがうさくて俺まで。
後でアイアンクローバーでも決めてやるつか。

「そりいえば、バスジャックのときも京は車を片足で軽々蹴り飛ば
してたな」

「へえー。だつて、こいつ昔銀行強盗を三十メートルくらい殴り飛
ばしてたわよ。屋上から飛び降りたりもしてたし」

「一応加減してるからな」

「…………ありえんだろ」

「あんたつて本気でやつたらどうのぐらになのよ…………」

勝手に人の話で盛り上がり勝手にひくなよ。
神崎は多少興味深そうに、俺を見て、そして。

「あんた、明日は私と組み手よ。いいわね？」

「悪い、明日は犬の散歩が」

「飼つてないでしょっ！」

「妄想の」

「医者に行きなさい」

「……明日はドクターが」

「あ、あんた、あたしのドレイの癖に付き合つてゐる奴がいるの？…？」

「おう！…こきなり襟首を掴みあげられ呼吸困難！」
とこゝか、ここつはどんだけ独占欲が強いんだよ。
お前キンジのほうが、好きだらうがキンジに嫉妬してや。
まあ、彼女なんていないし作る気もないが。

「離せ、この」

「いやだ！…あたしのドレイは誰にも渡すもんか！」

「ビリにもこかねーから！…お前とすりと一緒にしてるから…」

って、言葉の選択ミスつた！

確かに言いたいことを短くすればこゝなるけど。

キンジが「ええ……」と呟いてくる。

神崎も勘違いしたらしく、俺から離れて口をあわあわさせて顔を
真っ赤にしてキンジの後ろに隠れる。

「誤解だ――！…俺に彼女がいることからすべて誤解だ」

「は、はあつ…？」

神崎がぎゅるぎゅるとシインテールを振り回しながらじなる。
剣幕は凄まじく、怒りでキンジの腕の肉を引きちぎりつとして

いる。

「さっきのはなんなんのよつー。」

「だから、朝練がめんどつくて適当に理由考えたらおかしなことになつたんだよ。俺はそもそも口リコンじやねーしな」

「口リ、…………あなた、それどういう意味よ」

「やべつ、つい本音が」

「本音つてなによつー！ これでも少しずつ成長してるんだから……風穴つー！」

神崎が、今度は拳銃を抜いて追いかけてくる。

俺はやむなく能力を発動させて違和感がない程度に逃げていると、ハンドレッドパワーのおかげでよくなつた視力が、気になるものを目にとめたので立ちどまる。

神崎を押さえつけてから。

「おお、ライオンを取り押さえてる」

「誰がライオンよッ！ キンジ後で風穴だからつー！」

「ひいいつー！」

アホは放つておいて、俺が「二人とも掲示板みろ」というとまだ激しい興奮状態にいながらも二人ともみた。

星伽が呼び出しされるなんて珍しいな。

周りでもよく話題になる星伽は、品行方正、眉目秀麗な人間だ。キンジのことで暴走するのは知っているが、それは学校では表にでることはないので、つまり問題を起こすような人物ではない。

なにやら、事件の香りがするな。

このままここにいたら、まずそうだ。

神崎がそれをみて落ち着いたようなので、そつと体を解放して、その場から退散した。

ハンドレッドパワー、まだまだ。

一一一話 白雲との会話

「突然で」めんなさい。」

星伽が、土下座して謝る。

俺がさせているんじゃない、勝手にやつていいのだ。

俺は「別にいいから」と苦笑して、改めて事情を思い出す。

星伽が呼び出しそれていたのはボディーガードをつけろといひつけだつたらしく。

キンジと神崎は教務科に盗み聞きにいき、そのままそれを引き受けた。

そしたら、星伽がキンジの部屋で一十四時間体制なりいと提示して、今にいたる。

「……本格的にいづらくなつたな」

キンジを取りあつ一匹の動物。

俺がいるとややこしくなりそつなので、できれば誰かの部屋に泊めてもらいたい。

そういえば武藤とかいうキンジの友達が俺に同情してたな。

そんで携帯のアドレスをこつまにか交換したし、泊めてもらおうかな。

「ボディーガードにはあんたもつきなさよ」

「……俺まで？ 勝手に決めないでくれ」

「あんたはドレイなんだから」主人様の命令は聞きなさない

やけに語尾を強く言い切つて、何かを設置にいった。

なんでも魔剣とかいてデュランダルとよむ、イ・ウーのメンバーに星伽は田をつけられている。

だから、色々対策をうつてゐるらしい。

俺にはよく分からぬが。

荷物運びを手伝つて、それからキンジはどうかに出かけ、アリアもでかけようとしたので引き止める。

「なぜに主犯が逃げる?」

「あたしは用があるのよ。それまでアンタに任せるとわ

「用? それは星伽のボディーガードより大切なのか?」

「そうよ。さつき説明したのにつけたすなら魔剣は超能力者なのよ

「ス、ステルス?」

そういうえば学校の授業で聞いたことがあつたな。

なんだつけ?

消えるのか?

「ステルスってなんだつけ?」

「武僧なら自分で調べなさい! あたしはそいつ対策をしにでかけるの。正当な理由でしょ?」

ふんと振り返るとツインテールが後を追つようにして俺の顔面にぶつかる。

何かの花の香りが顔に張り付くように残る。

この香りは……シャンプーか？

女つてのはシャンプーとかも結構気にするのだろうか。

俺なんて子供用のリンスとシャンプーが一緒のを使ってるといふのに。

神崎に「子供用の使ってるなんて……ふふ」とか言われたときは腹が立つたが、リンスとシャンプーの違いもよく分からぬ俺は結局それを使い続けている。

次の日にシャンプーハットをプレゼンしてやった。つて、現実逃避もいい加減やめるか。

「そ、その、作戦会議しましょ」

「？まあ、いいけど。なんのだ？」

「京くんとアリアをくつづけるのと私と……キンちゃんふねつ！」

「妄想して爆発するなッ」

星伽がいやんいやんと頬に手をあてて首をふりまくる。
逃げてえ。すべてを放棄して逃げてえ。

星伽の誤解をとかないといけないのも面倒だし、星伽の相手をするのも面倒だ。

キンジが星伽が苦手だというのも分かるな。

俺は、突如誰からか見られているような気がして、窓の外を見る。
気のせいか。

本当にテコランダルじゃないよね？ 今疲れてるから相手にしたくないぞ。

「まず、京くんがアリアに夜這いかければいいんだよっ！」

「次の日俺の墓ができるな」

「ま、まずは名前で呼ぶのは？ アリアならそういうの嫌にしたこと思つよ」

「俺は人と距離をおくためにできるだけ名字で呼んでるんだ。星伽わざと、しきじめようつこいつと、星伽はちよつと嫌そうに顔を逸らした。

そういう表情をするんだな。

他人の前では常に優等生の余裕の笑みを携えている星伽とは違う印象的だ。

「私のことは、白雪でいいよ。星伽は私姉妹がいっぱいいるからなんだか慣れてないし」

「いまいち、理由になつてないが……」

気持ちちは分からぬでもない。

星伽がどうして巫女の格好をしているのかキンジに聞いたことがあつた。

家が神社だから、キンジはあまりよそうには話していなかつた。

星伽の家は基本外に出ちゃダメらしい。

全く変な家だよな、まるで監禁してるみたいだ。

星伽という名前を嫌つてるわけではないが、白雪としては「つちでくらい忘れないのかもしねり」。

「わーつたよ、白雪ね。白雪、白雪……」

「じゃあ、アリアもそれでね。次はそつだ、巫女占札をするね」

「占って？」

急に巫女らしくなったな。丘雪の巫女服は見ていたが、なんだか日本刀をぶんぶん振り回してみると丘雪が多かった。巫女に対してトラウマを覚えるほどにそれが多かったので最近では巫女ということを忘れていた。

「恋占い、ここよね」

「なんでもいい。あと将来俺がどんな仕事やってるかとか分かる?」

「うん、できるなら。先に恋占いからね」

どれくらいこの命中率か知らないが、俺としては会話をどちらかと云ふのは良くないことにうことで、一つ占ってもらいつゝとする。できれば平凡な答えではなく話のタネになるような面白いのを期待する。

「……京くさん。頑張って」

丘雪結果にわづ！

丘雪の顔が心労で倒れそうなほど同情で染まっていた。
俺はいつたいどんな恋をするんだよ。つーか恋するの?
しづめの俺よ?

「それは、俺が誰かと付き合つてることとか?」

「うん、うだよ。誰かはわかんないけど」

まじかよ。できれば白雪に口ひもひらわなければ良かつたな。
なんか、意識すると恥ずかしいな。誰かわからないということが
余計にダメージが来る。

「次は、将来だっけ？」

「おう

「うちのほうが気になる。

将来どんな仕事をしているのか。小説家になれているのか。
密かに今でも賞に応募するために書いていたりするんだぞ。

「……」

白雪は難しそうな顔で顎に手をあてていた。
すこしやばそうな雰囲気が漂ってるんだけど。

「……正直に言つと、分からぬ。何も、すべてが真つ黒

「近い将来に死ぬのか？」俺は

「こんなこと、初めてだから、分からなによ」

白雪も戸惑っていた。

俺はふうーと息を吐く。

後で、キンジには占いの効果がどれだけあるのか聞いていつよく外れることを切に願う。

頭を変えるように切り替えて、

「んじゃあ、細かい」とは忘れよ。それより、お前とキンジのことで

とだ」

さつさまで一方的に言いやられていたので、反撃だ。

「まず、これ持つておけ」

お守りを渡す。巫女にお守りを渡すのもなんだか変だな。
というか、これは親父の友達に作ってもらつた見掛けはお守りだが発信機の機能を備えている。

その人曰くたとえ海底一万メートルのところにいても、分かるし大げさにいつたら異世界にいてもわかるらしい。

異世界つてあの人（顔は見たことがないが）ゲームのやりすぎだ。
しかもよつぽどのことがなきや見つからない。専門の機械で調べても発信機だとわからずスルーされるといつていた。

「恋のお守りだ。それに『キンちゃん大好き、大好き、大好き』って言い続ければ願いが叶うぞ」

「ええつ―――」

白雪は焦つたように叫び、俺から逃げるように後ずさつたので、
そのあとしつこくキンジにどうすれば好感度があがるか教えてあげたのだ。

全部適当だが。

一一一話 別行動

あれから特に進展があったわけではないが、面白がりはじめているので俺は言つことはなにもない。

今日は、アリアは何かの用があるようで、帰りが遅い。

俺も、キンジと白雪と一緒にさせようと家に帰る時間を遅くする。既に時計の針は十時を回つており、そろそろ帰らうかなと家に向かうと。

アリアのかんかんアニメ声が響き渡る。

まったく、どうせアリアがキンジと白雪がいりやいりやしてるとこでもみて嫉妬したんだろう。

「つるせえぞ。近所迷惑も考えろ」

「あ、ん、た、ね、えー！」

声を震わして、俺に拳銃を向ける。へ？　いや、なんですか？　白雪を見ると、なんかすっげえ服がはだけている。

「あんたがいないから一人が、そ、そのふふふくを脱がせあうなんて暴挙にでたんじゃないっ！　あんたどこで何してたのよー！」

俺は、海に向かって水切りしたり、ワイヤー使つてブランコしたり……。

だ、駄目だ。正直にいいたら寂しいし、向みつ殺される。

「どんな？」

「ふ、ブランコで、ぶーらんぶーらんと」

「風穴」

パンパンと俺に向かつてくる銃弾を能力を発動させて避ける。そのまま、ドアを閉めて背中に感じるトラックが突進してくるような衝撃に耐えながら、

「どうしよ……」

キンジは中にはいなかつた。

すでにアリアによつて葬られたか。

さらば、キンジよ。

俺はドアの前から離れて全力疾走で逃げた。

そういうえば、アドシアードとかいう競技大会があるらしい。生徒はなにかしらの手伝いをしないといけないらしく、裏方での準備を手伝つている。

昨日はキンジは熱で学校を休んでいた。

キンジはアリアに海に突き落とされたせいだつて怒つてたな。

今頃、キンジたちは強襲科施設でバンドの練習だろつ。頑張れ、としかいえないな。

「それ運んでくださいーー」

他の生徒から言わされたので、よつこいせと荷物を持って運ぶ。裏方っていうのは存外なものだ。

本番に人目が集まる心配がないので俺にはいいことだ。そんな感じで仕事に力を入れていると、

(アリア?)

アリアが走っていく姿を遠めに確認した俺は荷物をとつとと運び、後を他の人に任せたアリアを追う。

下手に逃げられると白雪の護衛が面倒になる。

キンジはやるときはやるようだが、今は使い物にならないしな。

「アリア、勝手にボディーガードをやめるな」

「あ、あんた、なんでここにいるのよ」

アリアは今にも泣きそうな顔で、俺を見つめてくる。
だけばれないように田舎者じみたて拭つてこむ。

「お前に白雪のボディーガードを放棄してんなよ」

「あたしは……。ねえ、あんたは魔剣はいると思つてるの?」

「魔剣どころか、なにも事情を説明せずにいきなり俺にあれやれこれやれと押し付けてるだろうが」

「魔剣がいるって信じてる?」

俺が誤魔化そつと田頃のべぐちを告げたとおり確認するように追い討ちをかけてくる。
何かにすがるよつだな。

今ここにいるのはキンジと喧嘩したのかもな。

「しりねえーよ。ていうか、俺はこの学校に入ったのもつい最近でほとんど何も知らないんだからな。今は知ってる奴の後ろをついていくしかないわ。だから、アンタが、アリアの後ろをついてこくせ」

俺がなれるまではな。

実際アリアとの会話は面倒なときもあるがためになるときもある。キンジとだつてそうだ。二人とも俺にとつては先輩なんだ。

「もうすぐ、魔剣が白雪を襲うのよ。でも、あたしは口では説明できない。あたしにそれは遺伝してないから、つまべ説明できないのよ」

確かに、アリアはホームズ四世だつたか。

キンジが驚いて俺に報告してくれたのを思いだす。

今は、アリアを慰める言葉でもさがしてやるか。

「わかった、わかった信じてやるよ。で、お前はこれからどうするんだ？」

「しばらぐ、あんたたちとは距離を置いて行動するわ。じゃーね

結局、アリアとはそこでわかれた。

魔剣が近づいている、か。

キンジには常に白雪の近くに立つておらずしておらず。
アリアの言葉を信じじるなりすでに敵はこの島にいるのだ。

一十一話 スーツ

アドシニアード当口。

前準備を頑張った俺は今日はほとんどやる仕事がなかつた。
なので、俺はそこら辺を探索して、アドシニアードというものを樂しんでいた。

いや、楽しめるようなものなんてなかつた。

みんな殺氣だつていて、「なんでこいつこんなところにいるの?」
みたいな目で睨んでくるんだ。

よし、もう学校をふけてしまおうか。

いや、授業で聞いたがこういうイベントのときには気を引き締めなければならぬときいた。

人が大勢はいる今日のような日が敵としては狙い目なんだそうだ。

……キンジはしっかりと白雪のボディーガードしてんのか?

気になつた俺はキンジに連絡をいれる。

でないな。ついで、あまりしたくはなかつたが白雪に連絡をする。
でないな。

さすがに不安になつてきた。

俺はふと白雪に渡した発信機が気になつた。

だが、あの電波を追うにはスーツを着ないといけない。

ここで、スーツを着るのもなあ。

着るとしたら、戦闘があるときに行いたい。

と、思つていた俺の元へ周知メールが届いた。

『超能力捜査研究科 星伽白雪が半日ほど行方をくらましている』

といつたメールの冒頭から始まり俺はさらに読み進めていく。

……仕方ない。俺は人目がないのを確認してから、スーツを着るためにポケットにいれていた携帯のようなもののボタンを押す。

すると、一瞬で装着が完了したので正直驚きが隠せない。

『ふむ、初めて着たね』

と、頭の中に声が入り、視界の片隅に女性の映像が映る。見た目は俺と同じくらいの女の子。

「お、おまえ誰だよ」

『テレビ電話のようなものらしく、つい聞きかえす。確かに細かい使い方は着用したときに教えると聞いていたが……まさか』

『私があなたのお父様の知り合いの娘の色々武器の開発をしていたものだよ。まあ、いい。事件が起きたんじゃないか?』

「そうだ。発信機の使い方は?」

『それは君の体の状況などをすべて把握して心にリンクしているので、思えば使うことが出来るはずだ。腕の部分にはワイヤーを放出する道具も仕込んでいる。他の説明はあとでいいだろう。君は不思議な能力を持つていてるんだよね。それについても調整してあるから問題なく使ってくれて構わない。なお、これは録音されているので自動的に切れます』

しゅんと消滅した。

……今全部録音か。

まるで、こちらが聞く内容をすべて把握していたんじゃないかといふほどの応答率だ。

そういえば天才だもんな。

俺は心で発信機と願つてみると、本当に視界に地図が現れ赤く点滅する。

きっと赤く点滅しているところが、白雪の居場所なのだろう。なんていう科学力。何十年先に進んでるんだか、タイムスリップした気分だ。

場所は、地下か？

俺がそこにに向かおうと走り出すと、携帯が振動する。

「キンジか」

携帯のディスプレイを見ると、遠山キンジ（まえに見られてキンジとアリアにほいほいこなされて名前は戻した）の名前が。

『白雪が、魔剣に……』

要領のつかない話であるが事情を分かっている俺はすぐに告げる。

「今日白雪の居場所に向かってる所だ、詳しい場所は分からんが地下のよつだ」

『地下？……地下倉庫か！』

「ジャンクション？」

確かキンジが前に話していたな。危ないから近づかないほうがいいと。

『どうだ！？』

「詳しい場所まではちょっとな、独自で探してみるからとつあえず電話をきるぞ」

俺は返事を待たずに電話を切る。

正直今のキンジは焦つていてうるさい。

俺は地下に向かうためになるべく人通りの少ない道 目立つか
ら を選びながら進んでいく。

しばらく、走っていたがいまいち分からない。

地図を見てもどこから入れば近いのかまではわからない。
こりや、手に持てる地図を買ったほうが早いか？

と、なにやら矢印模様の銃の跡を見つけた。

……誰だ、こんなことするやつは。

でも、これを追つていけば行けるかもしれない。

他に頼るものもなかつたのでそれをあてにすることにする。

歩いていくと、排水溝が外されているのがわかる。

「先に誰か行つたのか？」

キンジか、アリアか。又は犯人か。

いや、犯人ならわざわざ目立つようになけておかないか。
中に入つてどんどん先に進んでいく。

エレベーターを乗ろうと思ったが動かない。

ハシゴをおりて、おりていくと段々と白雪に近づいていく。

この先に誰かいるのか？

赤い点が止まつたままだ。

地図が消えて、ぴぴっと三つの光が現れる。

生命反応、らしいな。

数は三つで、白雪、敵、誰かだろ?な。

俺は現場に近づいていく。

つて、ここは火薬庫か、危険だな。

ひょこっと顔だけを出して中を覗くと。

ターゲットを見つけたように、キンジが映る。

今は声をかけるのはやめよう。

中には他に一人がいるようで、会話も細々と聞こえる。

キンジが攻撃をしかけるのにあわせて、いや、キンジがピンチになつたら飛びだそう。

「白雪逃げろ！」

キンジが飛び出した！

俺もキンジを驚かさないよう移動して、先程聞いた説明どおり思い、ワイヤーを放出する道具のようなものが腕の部分から現れ俺の手に握られる。

腰に重さがあるので、確認すると俺の愛用の拳銃が腰についている。

なるほどな、って今はいいか。

キンジが途端に足を止めた。

なんだ？ ぴぴっとスーツが冷気を確認して、相手は超能力者だとである。

アリアが、なんかいってたな。

俺は見えない敵、だが勝手に標的をロックオンするので、ワイヤーを放つ。

自分で狙うが、どこに打てば相手に当たるかでるので、随分らくだ。

これで、敵か、白雪を捕まえられれば十分だ。

「くっ！」

たぶん捕まえたのは、魔剣のほうだ。
するすると自動で引いてくれるのだが。

戻ってきたのは先が切られたものだった。

「ちひ、逃げられたか」

と、思つたら、ぴぴっとなる。

今度はなんだと思つたら、逃げる赤い点とどいかに固定された赤点が映し出された。

そこで、キューピーンと来た。

さつきのワイヤーって発信機的なあれか。

そんで、今魔剣の腕にでもついているのだろう、巻きつけた部分

が。

後を追つか。

「お、お前誰だよつー！」

キンジが俺を見て、怖がるよつて叫ぶ。

あー、顔が見えてないからわからねーか。

顔の部分を上にあげることはできるようだが、説明は面倒だし、世間様にばれるとさつき映った女の子が大変そうだ。

「なに、通りすがりのヒーローさ」

俺はそれだけを残して、先に進む。

「あ、キンちゃん… …誰？」

白黒にも似たよつた反応をされる、

「君の友達は無事だ。それより魔剣はこの上でのせつてこつたのかい？」

梯子を指差すとはてな顔ながらも頷く。
確かに、動いている赤い点は上にいる。
てか両方とも赤だと分かりにくいいな。
青になれと思ったらほんとになつた。すごい、科学すごい。
俺は白雪を後から来るだろうキンジに任せて魔剣捕獲に動いた。

一十四話 スーツでの戦闘

梯子をのぼり、点を追いかける。

と、思つたら、点が突然動かなくなつた。

……動きをとめたか、気づかれて外されたか、か。
気づく可能性は皆無に近いだろうな。実際白雪の発信機は気づか
れることがなかつたので、相手は気づいていないはずだ。
単に腕についてうざかつたのだろう。

とりあえず、点滅していた場所まで向かう。

こちら辺は明かりがあり、さつきの階層よりも見やすい。
敵の奇襲に気をつけながら取られたワイヤーがあつた。

「はっ！」

ぴぴっと、一瞬遅れてだが生命反応がして、後ろから切りかから
れる。

何とか前に転がるようにして避けたが、危なかつた。

姿を見ると、銀髪のような長い髪をした、美人に分類されるよ
うな人間だった。

犯人が、女か。男のほうが思いつきり叩けてらくなんだがな。

「誰だか知らないが、一人で来てくれるとは好都合だ」

腕から、ワイヤーを放出する道具があわられ、俺はそれを握り、
放つ。
今度はつまえに斬りおとされる。

なんどかきた斬りつけをよけていた、俺は、ふと、足を取られた。
氷。そういうえばさつきも冷氣を感じていたし、つまり魔剣は氷の
超能力者か。

「死ね」

滑った俺にでかい剣を突き刺すようにして向けてくる。俺は、能力を発動して、生きている片足だけを使って横つ飛びした。

あぶねーあぶねー。

俺は、対能力者用拳銃レサを取り出して、抜きざまに発砲する。魔剣は驚いたように、剣で弾き氷を放つてくる。それを避けて、思いっきりジャンプして殴る。壊れたのは地面だけだ。

「やるな、魔劍」デュランダル

俺は首を捻つて骨をならしながら、にやっと笑う。まあ、相手には見えていないだろうが。

「私の名は、ジャンヌ・ダルク。人につけられたその名は好きではない」

「ジャンヌ・ダルク、ね。よし、とひとと倒すか」

「ただの武僧如きで、超僧に勝てるわけが……ないっ！」

早い動き、だが、俺にはゆっくりとしか映らない。剣の攻撃をよけ、追加で来た氷も避けて吹き飛ぶように腹を殴る。怪我はしないように調整した。

派手にとび、近くの壁に背をぶつける。

俺は、ふうーと息を吐き、追撃をしかける。

拳と蹴りを、何度も浴びせるが、何とか自慢の剣でガードしてい

る。

剣が堅いな。

本当は一発で殴つて壊してやろうと思つていたのだが、全くびくともしない。

せめきれない。圧倒的に戦力では勝つているが、戦いの経験が少ない俺はどうしても攻撃が単調になってしまつ。

親父には俺の百倍でも一撃も攻撃をくらわせぬことはできなかつた。

防御に専念すれば、動きが読みやすくて守りやすい。

「貴様、何者だつ」

「名前なんかねえー！」

俺が思いつきり回し蹴りを放ち、ジャンヌ・ダルクの剣の腹にぶつける。

痛い、足がひんまがりそつだ。

「くつ」

なぜか、一歩も引かずその場で、俺の拳の一撃をすべて剣でガードする。

俺が連續で殴るにも関わらずすべてガードされるので、足をあげようとしたときに異変を感じた。

ぴしひしと俺の足が頑丈な氷で動けなくされていた。

よくよく意識すると、スーツのなかの足まで冷やされていく感じに気づいた。

しまつた、完全に攻撃に集中しきっていたようだ。

おひつ！ と思いつきり、氷を振り払つたがぐらりと体が倒れる。

「は？」

足に、うまく力が入らない。
くそ、身体能力とかじゃなく、まるで筋肉を抜き取られたような
感覚がない。

「魔女の、氷は毒といつてな。しばらく満足に立つ事は難しいと思
うぞ」

にやっと勝ちが決まったよつに俺を見下す。

「氷像にして、全身を動けなくさせてやる」

俺は、やばいとまだ動く手で、ワイヤーを取り出して近くの壁に
打ち付けて距離を取る。

着地するが、うまく立てず、再び倒れる。

「狩る側が入れ替わったな」

嬉々として追いかけてくる。

『能力終了三十秒前』

やばい、俺に不吉を伝える警告音だ。

残り、三十秒。俺は、ワイヤーを使って距離を取ることしかでき
ない。

いや待てよ。今秘策を思いついたぞ。
足の先はうまく動かないが太股は動く。
これで戦おう。

「どうした、逃げるのせやめたのか？」

俺が座り込んでいるのを見て、そういったのだろう。

「いやーな。秘策を思いついたんだ」

「ならば、見せてみろっ！」

剣を向けて走つてくる。

というか、アリアたちまだ来てくれないのか。

俺は逆立ちはない。て、脳のうねて思いこきり劍を蹴り上げる

追撃したいが、さすがに逆立ちじゃ

११८

「待て、このつ！」

「な、なんか気持ち悪いっ！」

ジャンヌ・ダルクが逃げたつ！

「……ちは時間がないんだから逃げるな！」

逃げながら逃げ攻撃を仕掛けてくるか
全詰脚で粉碎する

『能力終了五秒前』

ぬわああ――――――!――!

「うわあ、と壊れる。」

そして、能力が切れた完全に立っていることができない。俺の倒れた音を聞いて、ジャンヌ・ダルクが振り返る。

俺はワイヤーを駆使して逃げまくった。

一十五話 三巻への移行

結局、逃げているうちにアリアたちがやつてきた。俺は文字どおり高みの見物で、ワイヤーにぶらさがつたまま三人の戦いを見ていたが、すぐに戦いに決着がついた。

「くそ、あの変な格好をしたやつに超能力を使いすぎた」

ジャンヌ・ダルクが、白雪に斬られた聖剣デュランダルを落とし、アリアたちに手錠をかけられる。

「それにしても、さつきの変な格好をしたやつは誰だつたんだろうな」

キンジが声をもらす。

ここつて結構音が反響するのか、離れた場所にいる俺にも声は届いていた。

「私の知り合いじゃないよ、キンちゃん」

「あたしは、見てないわよ。でも、そいつのおかげでジャンヌも早く捕まつたし、感謝ね」

それ、俺だからな。

「それにしても、京はまた来なかつたわね」

アリアが天井に向かつて発砲しそうなぐらい怒っている。 来てるから、顔をあげればそこには俺がいるからな。

「いいじゃないか、一人が無事なんだからさ」

キンジが気持ち悪いことを言つていた。

……あれがアリアを認めさせたキンジの隠された力なのか？
気障な態度を取ることからかなり気持ち悪いと想定される。

「あ、あいつ、後で調教しないと」

アリアが、物騒なことを言つてゐる。

とりあえず、早くそこからいなくなつてくれないかな？
俺が帰れないだろ。

三人はしばらく話したあと、外に向かつて移動したので俺も飛び
降りて着地に失敗して引きずるように帰つた。

それから、アドシアードのチアを見て、俺は寮に戻つて寝ていた。
アリアから二次会なるものに誘われたが、どうせぐちぐち文句を
いわれに行くだけなんだからわざわざ行かない。
疲れた。

最近、キンジは寮に帰つてくるのが遅くなつたな。
本人曰く下校拒否らしい。無理もないか、アリアにあれだけトラ
ウマの如くいじめられてればな。

ちなみに、俺も昨日アリアに散々振り回されてへとへとだつた。今日の七時を回った頃、アリアから連絡がきていた。

『キンジ、今寮に帰つてる?』

「いや? どうした? 何かあつたのか?」

『あたしから電話が女子寮に呼び出したんだって』

「? なら、女子寮にいるんじゃないかな?』

『いや、なんで、俺が』

『あたしは呼び出してないのよ。だから、あたしは情報科にいつてから女子寮に向かうわ。あんたは先に女子寮に向かって』

『お前がキンジと組んでればいいだろーが』

『あんたとあたしはなんだかんだで一緒に行動する機会が少ないわ。いざ一人で戦闘を行う際にそれじゃいろいろ問題あるでしょ?』

『最近はキンジとばかり組ませるよう一人での行動を増やしていくのに向こうからアプローチをしかけてくるとは。』

『あんたは、あたしの初めてのパートナーよ』

『なつた覚えはない』

『いいから来なさい。こなかつたら風穴』

アリア様は相変わらずの暴君ぶりだ。

俺は仕方なく、身支度を済ませて、拳銃は持ち歩かなくていいか。腕につけるワイヤーを発射させる機械（見た目はリストバンドのやうなもの）をつける。

これを使うのは入学試験のとき以来かもな。寮をでて、歩いて女子寮に向かつた。

一十六話 ドロボー

すでにアリアはいなかつた。

女子寮で聞き込みをするとアリアはどつかの階層に向かっていつたそだ。

呼んどいて勝手だな、おい。

俺は歩いていき、聞き込みしながらアリアが向かつたと思われる部屋を探す。

途端、ある部屋から強烈な光がドアの隙間から漏れた。

あそこは、アリアが向かつたと思われる部屋だな。

俺は走つてドアを開けると、中には一人。アリアとキンジが目を押せえていた。

「お前ら何やつてんの？ 泣く練習？ 演劇部にでも入ったのか？」

「その声は、京か！？ 窓の外を見てくれつー、理子がいたら追つてくれつー」

俺は言われたとおり、外を覗くとした。

「アンタ！ 逃がしたら風穴の刑だからつー。」

「いまいち事情がわかんないだけ……」

俺はワイヤーを屋上の手すりに引っ掛け、上る。
これ、マジで便利だよな。

「さて、屋上にきたが。正直あまり関わりあいのないお前と対面してもなあ

峰がいた。

「ひつせじぶりー！ きょーくん元氣だつた？」

「今元氣がなくなつたな。それより、何しに来たんだよ」

逃げる様子はないので、欠伸をしながら聞くと峰が猫のように擦り寄ってきた。

「理子ね、頼みたいことがあつてきたんだけどね。アリアもキーキーも全然話し聞いてくれないんだよ。だから、きょーくん、話聞いてくれる？」

つむると田に涙を溜めている。

甘い、甘い、胸焼けがしそうな濃厚なバーラの匂いが鼻に入ってきた俺は峰から距離をとる。

「峰・理子・リュパン四世 今度こそ逮捕よー！ ママの冤罪償わせてやるー！」

「見張つてやつてただ。俺、もつ帰つていいか？」

一人と入れ替わりに俺はあまり被害を被らなそうな場所へと移動する。

アリアと峰は、激しい口げんかをしている。

「京とキンジ、援護しなさい！」

生憎、武器持ってきてないんだが。

俺は腕を組んで二人の戦いを見続ける。

俺が、ハンドレッドパワーを使わないとできそつもないことを簡単に行っている。

バケモノ共だな、おい。

とても参加できそうになかったので、俺は成り行きを見守つていつが、最終的に醜い口喧嘩へと移行した。

俺は喧嘩とめに入るかと思ったら、それよりも先にキンジが動き出した。

俺は身の毛もよだつ気障な台詞を放つキンジから離れる。

子猫ちゃんとか、なんだよ。

あと、キンジは今はアリアが言つていた二重人格の片方のほうだ

ろひ。

確かに、二重人格に似ているな。

異常に女に優しくなつてゐるし、何かきつかけがあつて変身するのかもしぬれない。

今度は一緒に戦う所を見てキンジの能力でも推察するか。と、キンジの弁舌をきいていて、いろいろ分かつたことがあつた。まず、司法取引とかいうものをして今の峰は犯罪者ではない可能性が高いということ。

そして、キンジが気持ち悪いこと。

もう、俺はいらないかもしぬないな。

峰が用があるのはあの二人みたいだし、帰るか。

「アリアとキンジのせいでイ・ウーを退学になつちゃたの。しかも負けたからってブランドに 理子の宝物を取られちゃつたんだよお

ー

イ・ウーで前に聞いたことがある。一番最初の雷使つた妹を誘拐した奴と確かジャンヌもそこにいたらしいな。というか、妹……。最近全然あつてないな。

兄としては寂しい物だ。

つて、そうじゃない、イ・カーのま学校みたいなのか？ 退学つて。

「ブランド。『無限罪のブランド』……！？」イ・カーのナンバー2じ
やない……！」

へえ、そいつって強いのか。

最近、戦いが好きになってきた俺はなんだか今から体がうずいて
いる。

それに、ジャンヌとの戦いで俺の弱点もわかつたしな。

今度アリアと勝負でもするか。武器なしの接近戦オンラインでどれ
だけ戦えるか。

実戦経験が少ない俺が少しでも強くなるにはそれしかないな。

「一緒に ドロボーやるつよー！」

そうだ、強くなるにはドロボーしないとな。
あれ？ また話についていくてないぞ、俺。

一十七話 体力測定

後で聞いた話だが、峰の大切な物を奪い返すにあたり、戦闘はで
きるだけ回避するために泥棒の話が出たらしい。

翌日の放課後帰宅した俺たち三人は作戦会議をしていた。
といつても、やるか、やらないかの会議だったのだが、今は峰と
キンジの関係についてアリアが言及している。

「へんなことされて……アンタ、理子のトリロになつたんでしょう
！」

まるで、彼女が彼氏に怒るようだ。

へんなことされてつて、アリアはそれを見ていたのか？
面白そなので、とめはしないが。

キンジが、「フォローしてくれ」と耳打ちしていくが、フォロー
するだけの材料がないのだから、無理に決まっている。

「ビ、ビ、ビんなハレンチなことされたのよー 白状しなさいー。」

「アリア」

「何よつー。」

「キンジはいつからいつもと雰囲気が変わった？」

「へ？」「なつー。」

俺は、今キンジの能力について把握したいと思つてこる。

本人には前に聞いたが、嫌そつにしていたので勝手に調べる」と
にした。

「そりいえば理子のむ、むむむむ胸に溺れた後くらこよ

「胸に溺れるつて。キンジお前意外とやるのな」

「京——！ ちゅうとうじてん——！」

襟首を掴まれてアリアに聞こえないようにキッチャンにつれていられしゃがむ。

「何聞いてんだよー」

「俺はお前の能力について知りたいからな。今絶賛検索中」

「……下手なことを言われる前にお前には教えてやる

「おひ、とつとしてくれ

「俺のはな……性的に興奮すると、あるモードになるんだが

「性的に？」

だから、峰の胸で溺れたときに覚醒したのね。

「そうなると、いつもと違つて女性を守るのを優先して気障な台詞を吐くんだよ。分かつたら変な詮索はやめてくれ。アリアにばれたら俺の人生真っ暗闇だ」

「すでにかなり闇だがな

「言わないでくれ」

「あんたたち！ 何これひそかにやるのよ」

そこで、アリアに連れ戻されてソファに座りなおして会話が続く。結局はアリアがキンジのことが心配だと、やきもちやこしてゐるだけなんだといふことが判明した。

由雪、どつかいつてるとか聞いたが、これだとアリアに殴られるな。

「京も、理子の色仕掛けにかかつちゃだめよ」

「知らんじ、そもそも峰が興味あるのはキンジだらうが。俺はそれ辺に生えてるじやがいもみたいなもんだろ」

「じゅがいもはそれ辺には生えていないだろ」

キンジがツッコミをかましてくる。

そもそも、峰とは携帯のアドレス交換していない本当に縁の遠い人間だ。

だから、アリアが心配するようなことはたぶん、ない。

一回からまれたこともあつたが、あれは例外、イレギュラーだ。

と、そんな俺の元へ一本の電話が。

相手は、知らない番号だ。

でるかでまいが悩んだがアリアに「電話早く出なさい。つるや」といわれたのですると

『やつほー。つづいてえーす』

「……携帯握りつぶそつかな？」

『なになにー。照れ隠しかー？ きょーくんは可愛いねー』

「アリア、お前に用があるって」

俺は電話の相手をするのが面倒になつたので、アリアに放り投げる。

「だれ？」

「俺の妹」

「あつ、知つてるわ。前にあんたのことを色々聞いたことがあつたわ」

「あつセ」

俺はソファの背にビシっとおつかかり天井を見上げていた。

「確か、お前の妹ってアランクだったよな。親父は武装検事」

「そうなのか。ていうかよく知つてるな

「学校だとお前は結構有名人だぞ。妹と揃つてな

「お前の妹が有名だらうが。入学試験アランクさん」

「……それはやつを言つた能力のせいでな」

疲れたような笑顔を携えている。

今の顔は年齢が十歳くらい肥えたように見えたな。

「あ、アンタねえー。ふざけてんじゃないわよ

電話を終えたアリアは肩を震わし、背後に鬼を召喚していた。
こわー！ アリアは何でもできんのかよ。

「今の電話、理子だつたわよね。言つたわよね、注意しりつて

「だから、お前に渡したんだろ」

「理子言つてたわよ『きみーくんの彼女でーす』って。どうこう
ことかじり

あいつ、かつてに電話の相手を変えたからってへそでもまげたのか。

厄介なことしやがつて。

拳を固めながら歩いてくる。キンジに顔を向けるとそっぽを向か
れた。

どいつもこいつも敵だらけだなーおい。

「それは、あいつの小粋なジョークだろ。大人の女性のアリアなら
そのぐらい流してやれよ

「お、大人の女性？」

「そうだ、なあ、キンジ」

「お、おう

俺はキンジの脚の肉を思いつきり捻り上げながら、笑顔で賛同を得る。

アリアは、騙されやすいのかそのままテンション高めでぐるぐる回り始めた。

よし、おーけーだ。

一十八話 体力測定2

翌日の武慎高では中間テストがあった。

午前は一般科目のテスト（かなりできたと自負している）午後はスポーツテスト受けている。

すでに8種目あるすべてを終わらした俺は悠々気ままに寝転がっている。

キンジと一緒に回っていたが、途中でアリアを遠くに見かけたので俺は逃げて今にいたる。

もうやることないので、暇だ。

ふと、考える。

俺は、この学校でなんだかんだやばい事件に巻き込まれているんじゃないだろうか。

キンジとアリアは何か知っているようだが、聞いても教えてくれそうにはない。

一番の謎はイ・ウーのことだ。

昨日アリアがキンジに教えたら存在を消されるなどといっていた。冗談ではないようだった。俺の親父の仕事仲間が全力で追いかけてくるらしい。

戦えば確実に負ける、逃げるのなら余裕だらうな。

「きょーくーん！」

俺はなにやら戻ったるい匂いがしたので瞬間的に、横に寝転がつて避けた。

「なんだ？ 峰」

「理子って呼ーんでっ」

甘えるようひたすらに抱きついてくる。

さつげに俺に抱きついてきたので、

「呼んでやるから離れる。俺は、忙しいんだ」

「ふうーん。随分と暇してたみたいだよ? アリアとキンジが仲がいいから?」

「まあーな。一人の仲を壊すような無粋な男じゃないからな」

「なら、理子と付き合おひつよ。理子の体はきょーくんの自由にしていいんだよ?」

そういう体育着の胸元を広げるひつ張り、自分の胸をアピールしていく。

なんていうんだつけな。色仕掛けを専門とする学科があつたよな、こいつセコでやつていけるだろ。

「お前は、なぜ俺のことを狙う? キンジとアリアはお前と戦っているから実力は知つているだろうが。おまえは俺の実力を情報でしか知らないだろ。なんで、そこまで俺を巻き込みたいんだ?」

「……よく考えてるな」

これが、裏理子か。キンジもよく合ひ言い方を思いつくな。

今までの可愛い、男うけしそうな声からいつぺんして低い声に。

俺にも自分の正体を隠すこととはしないようだな。

前に屋上でみたから、知つているが随分と真逆だな。

「どうちが素だ？」

「はーてね。どうでしょ？」

「じつじつと答えるな。じつちかにじつへれ。せつせの質問に答える」

「わよーくんの実力は生で見てるからしつてるよ。まあ、昔の「」と
だね。それにイ・ウーにも聞こへるしね」

「誰だ、この野郎。」わざとら戦に不慣れなのに、くわ

そーいえばアリアに頼むの忘れてたな。
でも、頼みにくくな。

「せうだよねー。わよーくんは実戦が少ないもんね。なんだつたら
理子が戦い方教えてあげよつか？」

まるで、俺が考えていることを読んだようなタイミングだ。
読心術でもできんのか？

「……まあ、タダならな」

「理子の泥棒手伝ってくれるならいいよ? ただし、戦闘以外も教
えてあげちゃおつかな?」わざのこととかね

「わざとまた胸をみせつけはじめてる。
なんだ? こっちつて?

詳しく述べないが、触れてはいけなさそうなので、無視して
おひや。

「俺はこの後キンジとテストを受けないといけないんだよ。だから、少し休ませてくれ」

「テスト？ ああ、探偵科の自由参加の？」

「そ、俺はこのままだと単位が危うくな。あまり依頼とか受けでないし」

「へえー」

面白いものを見つけたとばかりに田を細める。

獣みたいだな。

俺は、確か否定したはずなのにいまだに横に座っている理子を無視して大した時間眠ることはできないが、眠りについた。

「それにしても女子が多いな」

キンジが嫌そうに呟く。

こいつはしようがないか。俺だつてあんまり女子が多いのは好きじゃない。

「一番後ろなら人いないからそこでいいだろ」

一人でプリントを受けとり、一番後ろに向かう。
暇な時間、プリントをみるとする。

『遺伝学』についてのDVDを見るようだな。そういえばキンジの能力は遺伝性らしいな。俺の能力は家族の誰にも遺伝していないので、突発性なのだろうな。

この世界に似たような能力の人間はないと親父が言っていた。
超能力の一種らしい　白雪は鬼道術とやらで身体強化に似たようなことをしていた　が、正確にはことは分かつていない。

俺自身がそういう検査を嫌いで、自分の能力を公にさらさないよう親父に頼んでいるのも原因の一つだな。

「ほらほら、皆さん。騒がないで着席してください」

講師の先生が手を叩きながら、声をあげる。

なんだか、弱そうな先生だな。武偵高には似合わない。いや、これが普通なのか。

武偵高の生徒は恐ろしい教師ばかりだから感覚が狂っているのかもしれない。

それにも講師の先生はどうかであつたことがあるよくな……

?

しかもかなり昔に。

「なるほどな……」

「なにが『なるほど』なんだ?」

「あの人、人気なんだよ女子に」

「だから、多いのか」

大変だな、イケメンの先生は。
それでも、何度も注意すると女子生徒たちもしぶしぶと席に座つ
ていた。

俺はそれを絵画のように見ていたが、ふと、キンジの隣に誰かが
座るのを見かけた。

同時に部屋が暗くなつた。

「り、理子……なんでくるんだよ?」

キンジの慌てぶりは理解できないが、俺はそちらを無視してロボ
Dに顔を向ける。

「ん……つ」

なんか一人のほうから変な声が聞こえる。
顔を向けると、なんだかピンク色空間が形成されていた。

理子の頭をひたすら撫でている。

「きょ、京助けてくれ」

小さいが、それでも流してようが泣かせる声をあげる。

「理子、もうとやつていいだ。面白いから

「あいあこでーーー。」

「煽るなつ

キンジは、理子を無視してDVDを見よつとしたので、俺はシャーペンを奪い理子に手渡す。

理子はそれを胸にしまいくんだ。
俺たちばぐつと親指をたてる。

「つひ、何してんだよつーお前どれよ

キンジは涙目になつたうになつながらも俺の胸倉を掴む。
俺はそこ「シャーペンを芯をださず」突き刺してやる。
「理子、そいつ欲求不満みたいで、俺をこじめるからびいかじと
いてくれ」

俺は一応キンジのためを思つているんだぞ。
女になれておかないと将来きっと大変になるだろつ。
だから、理子を使いキンジの女嫌いを少しでも治してやうと友達想いだな俺。
後付けだが。

「お前のシャーペン寄せ」

「シャーペンがキンジに使われたくないって、どんまい」

俺はキンジの手が届かないように一人から距離をおく。

あたふたと慌てふためくキンジを見ているのは面白いなあ。

理子は、あれ、からかってるのか？ それとも本気？

本気だったら、面白いのに。ハーレムじゃん、今でも結構なハーレムだが。

俺は一人悠々とプリントの問題を終えると、暗い部屋に明かりが戻る。

そして、俺たちを見ている教師。

「な、なにをしているんですか？」

戸惑ったような、でも怒りを含んだ声だ。

「俺はなんの関わりもありませんから」

そういうてプリントを渡す。できれば始まるまえに感じた違和感を確かめたかったが、今はそんな空氣ではない。

「理子も問題は全部とけてまーす！」

理子は俺と同様にプリントを渡した。

いつ解いたんだよ、手品師か。

俺たちもキンジをおいて逃げ出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4295v/>

緋弾のアリア 五分間の最強

2011年9月25日05時57分発行